

付いている。また各段の縁は斜めに切り込まれている。さらに本資料ではそこに釘が二本打たれている。これらの特徴は浄法寺の他の資料にも共通しており、国内各地の資料を見渡しても極めて珍しいものである。このほかの特徴としては台形が後方に向かって幅が絞られたバチ型であること、後部軸受が台と一体で作られ、ほぼ原木の木取りの形を残したカマボコ型であること、軸の径が最大 78 mm と全国平均の 57.7 mm を 30 mm も上回る太さであること等々が挙げられる。またもう一つ注目されるのは軸頭の爪の配列で、4本の爪が(ハ + ニ)の形に付いていることだ(図参照)。これもまた極めて珍しいと言わねばならない。なお、台中央に四角の穴が開けられて一見足踏みろくろを思わせるが、本資料には手引用の綱が付いており、綱の両端には木製の把手が結えられていることから、手引ろくろとして使用されたことは間違いなく、角穴の意味は軽量化を考えたものと思われる。引綱はシナノキの皮製で把手の形は櫛型と輪型が混用されている。

② テビキロクロ(国指定番号 824/調査台帳番号 29-浄法寺2)採集地大字大清水(山内)  
製作年代 明治中期 制作者 山内万治の先代

本資料も①と同様この地域独特の特徴を示すがサイズは一回り小ぶりで、軸径も最大で 65 mm である。軸受板の上辺には中央よりやや左寄りに斜めの溝(幅約 30 mm)が刻まれている。①の段差構造とは異なるが釘が一本溝の外に打たれている等、類似したところもある。爪は4本で配列は(ハ + ニ)の独特なもの。台の形や後部軸受の造りも①と同様である。

③ テビキロクロ(国指定番号 825/調査台帳番号 30)採集地大字大清水(門崎)  
製作年代 江戸後期 制作者 佐藤由直の先代

4点の資料の中では最も小型であり、木質の劣化状態から製作年代も最も古いのではないと思われる。基本的な構造や形態的な特徴は前二点の資料とほとんど同じだが、この資料の最大の特徴は後部軸受にある。一般的な軸の構造では後部軸端に径十数ミリ、長さ 20 ~ 30 mm 程度で先端がわずかに細く絞られた鉄芯が打ち込まれており、その鉄芯が後部軸受の穴に差し込まれて軸の回転を可能にしている。極めてシンプルで確実な方法と言える。しかし本資料の軸を後部軸受から外して驚いたのは鉄芯ではなく、ほぼ軸の径と同じ木芯が、それに見合った大きな穴に差し込まれていたのである。木芯部の長さは約 60 mm、径は入り口 40 mm、奥が 42 mm と逆テーパ状で、軸受の穴の内周には薄板が何層か巻いてはめ込んでいる。がたつきを押さえるためのパッキンの役目と思われる。後部軸受のこうした構造は初めて目にするもので他には例のないものであった。<sup>(2)</sup> このほか前部軸受の上板の斜めに切込んだ溝、4本爪のユニークな配列などは前二点と同じである。

④ アシフミロクロ(国指定番号 826/調査台帳番号 31)採集地大字大清水(大清水)  
製作年代 江戸期頃 制作者 不明 使用年代 江戸後期~明治前期  
使用者 佐藤嘉宏の先代

資料所在地(施設)	浄法寺歴史民俗資料館(岩手県二戸市)	地方名 テビキロクロ	
調査台帳No.	28 浄法寺 - 1 NO. 822 (分類 II - 2 - 23)		
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財 1987.03.03(昭和62.03.03)指定		
			
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 テビキロクロ(手引き轆轤)</p> <p>採集地 岩手県二戸郡浄法寺町大字大清水山内(サンナイ)</p> <p>所有者 山内(サンナイ)末吉</p> <p>採集年 昭和55年4月22日</p> <p>〔製作地〕採集地に同じ 〔使用地〕採集地に同じ</p> <p>〔製作者〕山内末吉の先代</p> <p>〔製作法・材質〕台はケヤキ、軸はヤマボウシ、鉄輪と爪はほとんどが鍛冶屋の製作</p> <p>〔使用法〕一人が綱を引いて軸を回転させ、もう一人が轆轤鉋を構え渡し棒を支点にして外側を挽く。渡し棒をもう一本90度くらいに掛けて内側を挽く。</p> <p>大型の轆轤なので浅鉢などを挽くのに使用。</p> <p>〔保存状態〕</p> <p>全体に煤けて黒いが状態は良い。使い込まれて一部がすり減って木目が浮く。</p>		<p>〔観察記録〕</p> <p>基本データ = 全長955mm、軸長770mm、軸径70~78mm、重量21kg</p> <p>支柱がV字に開いた独特の形。縄と半月型の把手がついている。</p> <p>&lt;支柱・軸受&gt; ヨコ受型の変形と思われるが、支柱がV字形に開いている。上下二枚の板で軸を挟む方式、V字のため支柱に溝があってもスライドさせて、はめ合い精度を調節できない。軸受部に薄板を挟んで調節している。軸受はシンプルな段欠き型。後部軸受も蒲鉾型の独特なもの。注油孔に蓋。軸受の栈木の上に段があり、釘が二本。渡し棒と呼ばれるろくろ鉋の支持棒の一端をここに掛けたものと思われる。(古い作業写真により推定)</p> <p>&lt;軸&gt; 太めの軸で、浅鉢など大きな製品を作ったと思われる。爪は4本、付け根で18×14mmの丈夫な作り。先端はストレートに細くとがっている。爪の配列は独特なパターンで、二本が平行、他の二本が円環である。</p> <p>&lt;台&gt; 台はT字のくびれがなく、バチ型。胴の中央に四角い窓が開いているが、重量を軽くするためか、足踏み用の綱を通すためのものか不明。台の厚みはないが全体が大きく重い安定感がある。</p>	





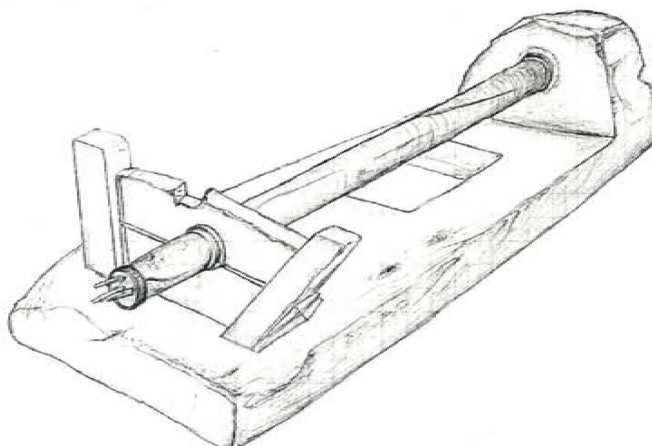
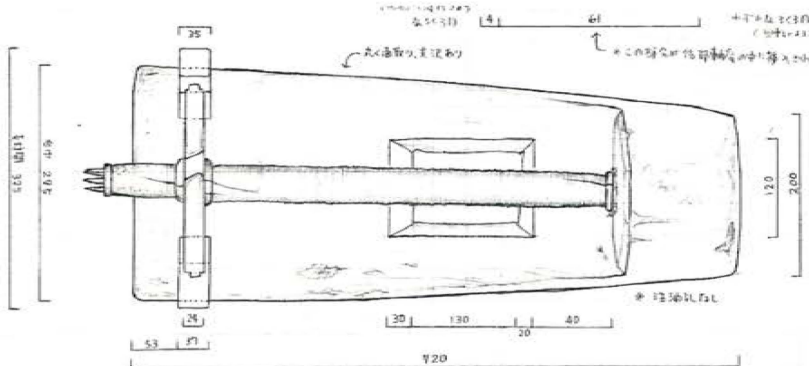
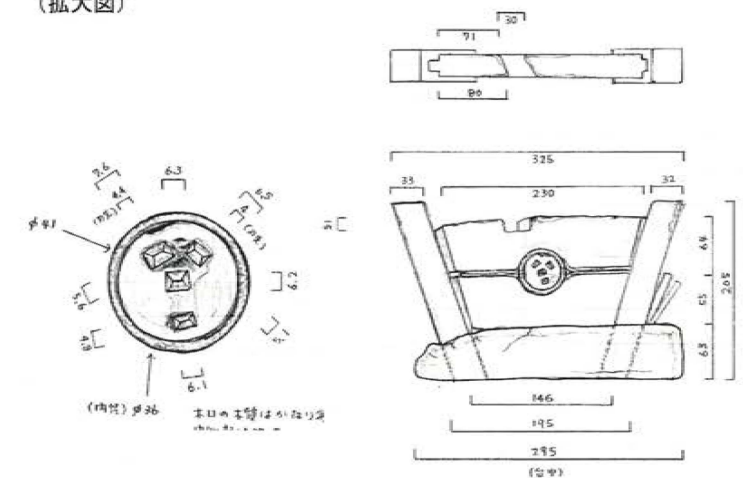
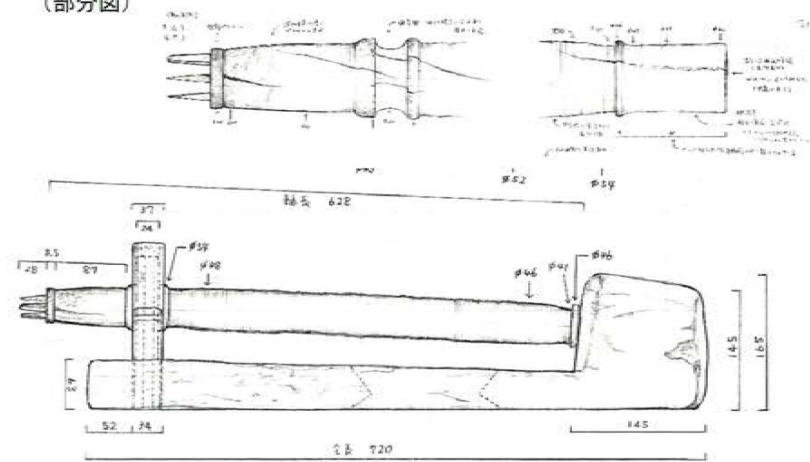
資料所在地(施設)	浄法寺歴史民俗資料館(岩手県二戸市)	地方名 テビキロクロ	
調査台帳No.	29 浄法寺-2 NO. 824 (分類 II-2-25)		
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財 1987.03.03(昭和62.03.03)指定		
		<p>〔観察記録〕</p> <p>基本データ = 全長870mm、軸長718mm、軸径58~65mm、重量12kg</p> <p>支柱がV字に開いた独特の形。</p> <p>&lt;支柱・軸受&gt;ヨコ受型の変形と思われるが、支柱がV字形に斜めについている。上下二枚の板で軸を挟む方式だが、V字のため支柱に溝があってもスライドさせて、はめ合い精度を調節できない。軸受部に薄板を挟んで調節している。軸受はシンプルな段欠き型。後部軸受は独特の薄鋸型。注油孔あり、蓋なし。軸受の栈木の上面に段がつけられており、釘が一本。渡し棒と呼ばれるろくろ鉋の支持棒の一端をここに掛けて使用した。(古い作業写真により確認)左側支柱は取り付け不良で、本来は台奥まで差し込まれている。ほぞ穴は台底部へ貫通。</p> <p>&lt;軸&gt; 軸径は後端に比べて前方がわずかに細くなって、軸受手前がツバ状になっている。爪は4本、爪の配列は独特なパターンで、二本が平行、他の二本が円環である。軸頭は軸より少し太い円筒形で、幅広の金輪もほぼ軸径と同じ。</p> <p>&lt;台&gt; 台はT字のくびれがなく、パチ型。胴の中央に四角い窓が開いているが、重量を軽くするためか、足踏み用の綱を通すためのものか不明。</p>	
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 テビキロクロ(手引き轆轤)</p> <p>採集地 岩手県二戸郡浄法寺町大字大清水山内(サンナイ)</p> <p>所有者 山内(サンナイ)万治</p> <p>採集年 昭和55年4月22日</p> <p>〔製作地〕採集地に同じ 〔使用地〕採集地に同じ</p> <p>〔製作者〕山内万治の先代</p> <p>〔製作法・材質〕台はケヤキ、軸はヤマボウシ、鉄輪と爪はほとんどが鍛冶屋の製作</p> <p>〔使用法〕一人が綱を引いて軸を回転させ、もう一人が轆轤鉋を構え渡し棒を支点にして外側を挽く。渡し棒をもう一本90度くらいに掛けて内側を挽く。</p> <p>ひやげ、重鉢、へがい(浅鉢の小さい器)などを挽くのに使用。</p> <p>〔保存状態〕</p> <p>全体に煤けて黒いが状態は良い。使い込まれて一部がすり減って木目が浮いている</p>			





資料所在地(施設)	浄法寺歴史民俗資料館(岩手県二戸市)	地方名 テビキロクロ	
調査台帳No.	30 浄法寺-3 NO. 825 (分類 II-2-24)	 	
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財 1987.03.03(昭和62.03.03)指定		
		  	
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 テビキロクロ(手引き轆轤)</p> <p>採集地 岩手県二戸郡浄法寺町大字大清水門崎(カンザキ)</p> <p>所有者 佐藤由直</p> <p>採集年 昭和55年4月22日</p> <p>〔製作地〕採集地に同じ 〔使用地〕採集地に同じ</p> <p>〔製作者〕佐藤由直の先代 〔製作年代〕江戸後期</p> <p>〔製作法・材質〕台はケヤキ、軸はヤマボウシ、鉄輪と爪はほとんどが鍛冶屋の製作</p> <p>〔使用者〕佐藤由右衛門 〔使用年代〕江戸後期～明治中期</p> <p>〔使用法〕一人が綱を引いて軸を回転させ、もう一人が轆轤鉋を構え渡し棒を支点にして外側を挽く。渡し棒をもう一本90度くらいに掛けて内側を挽く。</p> <p>椀類、茶托などを挽くのに使用。</p> <p>〔保存状態〕</p> <p>かなり古く全体に木質、鉄の劣化が見られる、特に台は傷みが進んでいる。</p>		<p>〔観察記録〕</p> <p>基本データ = 全長720mm、軸長628mm、軸径46～48mm、重量7.3kg</p> <p>特徴 = V字型支柱。後部軸受け部が鉄芯ではなく、段欠きの木軸</p> <p>＜支柱・軸受＞ヨコ受・V字型。上下二枚の板で軸を挟む方式だが、V字のため支柱に溝があってもスライドさせて、はめ合い精度を調節できない。軸受部に薄板を挟んで調節。前部軸受はシンプルな段欠き型。後部軸受は鉄芯ではなく木軸を段欠きで絞って、それをそのまま大きな軸受の穴に差し込んでいる。軸受穴には、はめ合い調節の薄板を何枚か重ねて軸を巻くように入れている。軸受の棧木の上面に一つの段あり。渡し棒と呼ばれるろくろ鉋の支持棒の一端を掛けて使用した。(古い作業写真により確認)</p> <p>＜軸＞ 軸の表面は全体が波打つように凹凸があり、ろくろ目ではなく引き綱による摩滅痕か。爪は4本、爪の配列は円環と平行の併用型でセンターが偏っている。軸径は細く、軸頭もシンプルな形だが、軸受の前後がツバ型になっている。最大の特徴は鉄芯を使わない後部軸受けの方法。古い形を伝えるものか。</p> <p>＜台＞ 台はT字のくびれがなく、パチ型。胴の中央に四角い窓が開いてい。傷みが激しく、木目が浮き上がって角が崩れ、台にも穴が開いている。</p>	



台帳番号	30	岩手県二戸市(浄法寺)〔浄法寺歴史民俗資料館 蔵〕	地方名	テビキクロロー3	国指定重要有形民俗文化財 825
【見取り図】		【平面図】			
					
【正面図】 (拡大図)		【側面図】 (部分図)			
					

資料所在地(施設)	浄法寺歴史民俗資料館(岩手県二戸市)		
調査台帳No.	31	浄法寺 - 4	NO. 826 (分類 Ⅲ-1-1)
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財 1987.03.03(昭和62.03.03)指定		



#### 〔観察記録〕

基本データ = 全長857mm、軸長695mm、軸径44mm、重量12.5kg

特徴 = 長い爪。台前部及び後部軸受付近に油様の固形付着物  
 <支柱・軸受>ヨコ受・V字型。上下二枚の板で軸を挟む方式。前部軸受は単純な段欠き型。軸受の棧木の上面に一つの溝あり。研磨用ろくろでは必要ないろくろ鉋の為の渡し棒の「受け」であることから、当初は木地挽き用ろくろであったと思われる(手引き用の綱と把手が付随している)。その後研磨用ろくに転用したものか。その時足踏み式に改造したものと思われる。(台の中央の四角い窓)後部軸受はテーパのある鉄芯、太くて丈夫な作り。注油孔あり、蓋なし。この周辺にも黒色の付着物が固化している。  
 <軸>軸径は細く、軸頭もシンプルな形で、軸受の前後がツバ型になっている。爪は4本、配列は円環と平行の併用で、先端が細くとがった爪は長さ7cmあり、異様に長い。小さめの金輪の中に束ねたように埋め込まれている。

<台>台はT字のくびれがなく、パチ型。胴の中央に四角い窓が開いている。

#### 〔資料来歴〕

地方名 アシブミロクロ(足踏み轆轤)

採集地 岩手県二戸郡浄法寺町大字大清水 大清水(集落)

所有者 佐藤嘉宏

採集年 昭和55年4月22日

〔製作地〕採集地に同じ 〔使用地〕採集地に同じ

〔製作者〕不明 〔製作年代〕江戸時代ころ

〔製作法・材質〕台はケヤキ、軸はヤマボウシ、鉄輪と爪はほとんど鍛冶屋の製作

〔使用者〕佐藤嘉宏の先代 〔使用年代〕江戸後期～明治中期

〔使用法〕軸の先端の爪にホズキ(椀取り付け用のアダプター)を打ち込み、ホズキに研磨する椀類をあて、ツツツメ(?)で押さえつける。(轆轤台の下に付けた)踏み板を踏んで椀類を回転させ、トクサ、紙ヤスリ、トイシ等で研磨する。

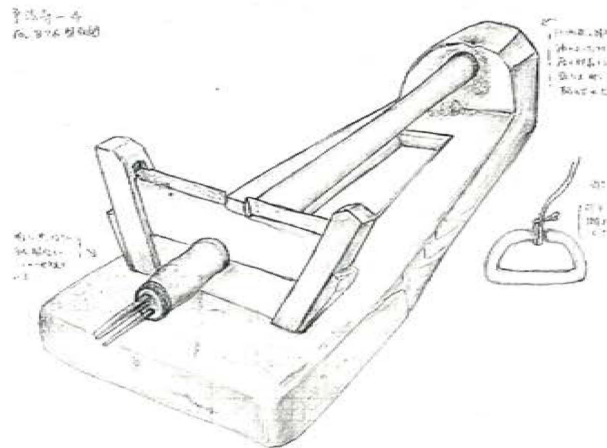
手引ろくろにも使用することが可能。(手引ろくろを研磨用に転用したと思われる)

〔保存状態〕古い資料だが、比較的良好な状態。台の前後に油様の付着物あり。

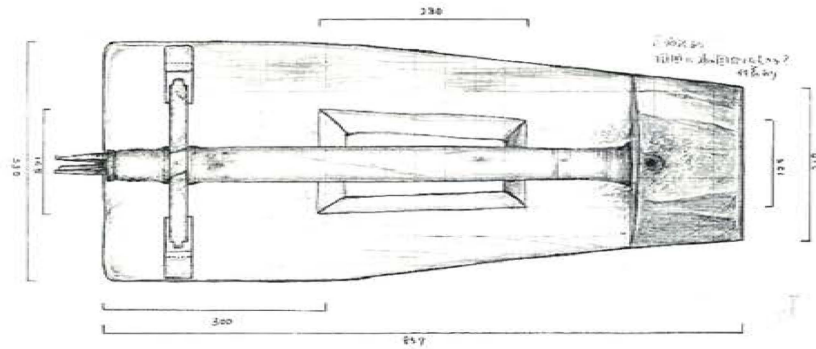


台帳番号	31	岩手県二戸市(浄法寺)〔浄法寺歴史民俗資料館 蔵〕	地方名	テビキクロロー4	国指定重要有形民俗文化財 826
------	----	---------------------------	-----	----------	------------------

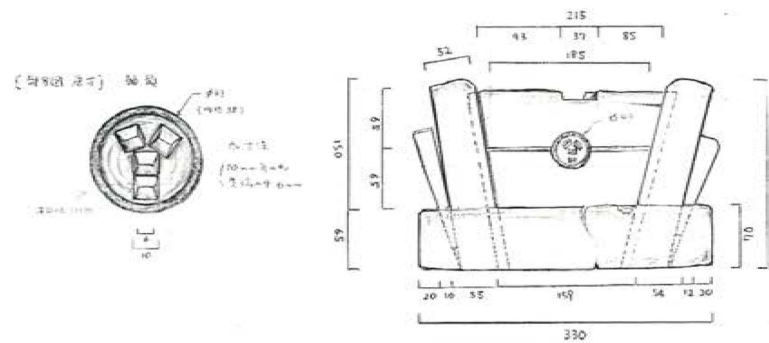
〔見取り図〕



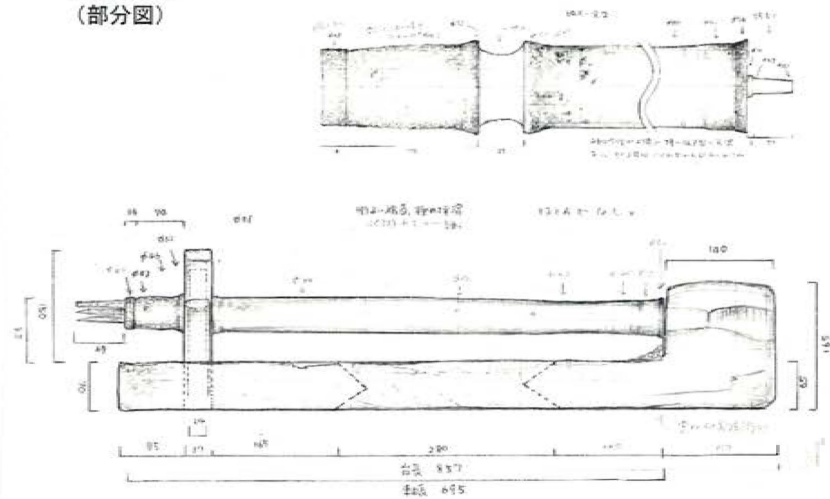
〔平面図〕



〔正面図〕  
(拡大図)



〔側面図〕  
(部分図)



本資料は構造的には前三点の資料と同じであるが、調査カードの名称はアシフミクロロとなっており、用途も「研磨作業を行うのに使う道具」「回転を利用して（椀類を）磨くように工夫されている。」とあり、いわゆる研ぎろくろとみられる。調査カードにはその作業の様子が簡潔に記されており「先端の爪にホズキを打ち込み、ホズキに研磨する椀類をあて、ツツメで押さえつける。踏み板を左右交互に踏んで回転させて、砥草、紙ヤスリ、砥石等で研磨作業を行う」とある。ホズキは椀を嵌める凸型のアダプター、ツツメは椀が脱落しないように糸底の中心を押さえる柔らかい木の棒のことだろう。また備考欄に「手引ろくろにも使用することが出来る。」とあるように、当初は木地挽用の手引ろくろとして使っていたものと考えられる。それは前部軸受の上板に他の三点と同じ斜めの切込み溝が一つあること（この溝の用途については後述）、引綱に手引のための把手が付いていることから解る。なお、把手は<sup>あぶみ</sup>鑑型で綱を結びつける円弧の中央部にはくびれがあり、結び目がずれないようにになっている。

以上が浄法寺歴史民俗資料館で調査した手引ろくろ4点の概要である。次にこれらの道具が使われた背景、すなわち浄法寺及びその周辺における木地・漆器製作の歴史をたどってみたい。

## （2）安比川流域の漆器産業

岩手県の北の内陸部、秋田県と青森県に接する地域には秋田県側との分水嶺から流れ出した安比川が北東に貫流し、やがて馬渕川に合流して八戸市で日本海に注いでいる。この安比川流域には古くから漆が栽培され豊富な山林資源と相まって漆器椀が生産されてきた。

ただ、その起源は諸説あって定かではないようだが、少なくとも中世末に遡ることが出来るという。その根拠として岩手県史では一般に古式箔椀と呼ばれるこの地方産の伝世品が天文年間（1532～54）、永禄年間（1558～69）の古寺住職の遺品として伝えられている事を挙げている。<sup>(3)</sup> またおなじく佐藤源八はその淵源を藤原秀衡の時代にまで遡るとの見解を述べている。<sup>(4)</sup> このように近世以前にすでに漆器生産の歴史が始まっていたことは郷土史家が等しく主張しているところで、田中庄一は『近世二戸漆の研究 木地椀』で次のように述べている。<sup>(5)</sup>

浄法寺から産した椀は古代末期に平泉の藤原氏の紹介で京都に知られたとも云われている。時代は、ずっと降って南部氏が居城を盛岡に移した直後の近世初期の古文書のうちには、浄法寺椀・箔椀・黒椀・木地などを記述した多くの南部文書や浄法寺産の木地に関する民間文書を数多く収録することが出来た。

さらに田中は「奈良朝末期の建立と伝えられる八葉山天台文化の影響を受けて発達した平安期に、陸奥平泉の藤原氏によって京都に紹介せられたという浄法寺産の木地椀は、たしかに陸奥の御国産物であったに相違ない。」とし、すでにその時に藩侯に献上するほどの完成度の高さであったことや、中世から伝えられた古式椀が現に存在すること、などから



浄法寺腕の歴史の古さを主張する。しかし、その古さを示す文献記録は近世以前のものは確認されていないのが現状である。

江戸期に入れば南部藩の「雑書」(藩の日記のようなもの)という記録が多く残されており、そこからこの地域の木地屋の営みを窺うことができる。ただその様子は他の地域には見られない独特のものであった。田中によれば当時発達していた馬による交易が木地の運搬にも活用され、さらに木地屋はろくろ等の道具を馬に積んで遠方まで出稼ぎにいていたというのである。木地を運ぶ馬を木地伝馬、ろくろを運ぶ馬を軸伝馬といったという。いくつか事例を挙げているが、その実態は御用木地挽が藩の命によって、或いは領内の招請によって浄法寺から盛岡や、花巻などへ馬を使って仕事に出かけて木地を挽き、納めていたものと思われる。無論その前提として御用木地挽という位置づけもあっただろうし、さらには漆掻きに始まって木地製作、漆器製作が一貫して藩の保護管理の下で行われていたという実態があったからである。

安比川流域のこうした集落単位の分業による漆器製作の形はすでに古くから形成されていたものと見られる。このことについて周辺の自治体史によく引用されている基本文献の一つに『漆掻き漆塗師の生活習俗』がある。内容のほとんどはタイトルの通り漆掻きと塗師に関するものだが、「二、生産・生業」の「一、木地屋、塗師、搔子の分布」に注目すべき点が記されている。要約すれば、この地域の漆器産業は安比川流域に沿って立地しており、その産業に関わる木地屋、塗師、搔子の三つの職業的集団がそれぞれ分業体制を担う形で集落形成して、安比川の上流地域に木地屋、中流に塗師、下流沿いに搔子という特色的な分布を示している、<sup>(7)</sup>というのである。

安比川流域でこのような木地、漆器、生漆の生産に関係してきた町村はどれだけあったのかということについては、古くは多くの村々に分かれていたが全体としての枠組みは一定しており、平成の合併直近の自治体では二戸郡の安代町と浄法寺町の二町がそのエリアにあたる。浄法寺町史、安代町史は共にこの三種の職人の流域分布データを表にして載せているが、細かな集落ごとのデータを地区ごとに集計して全体の傾向がわかるように加工したのが次頁の[Ⅲ-表1]である。これを見れば上流域から下流域に3つの職種が集団をなして分布し、漆器生産の分業体制を形成していた様子がよくわかる。昭和20年代と61年のデータの比較はこの地域の伝統産業が高度経済成長期を挟んで急激に衰退したことを如実に示している。

ここからは本論のテーマに即して木地屋に絞って考えていきたい。まず、注意しておきたいことは、こうした独特の分業体制が近代は勿論、近世をも超えて遡りうる古い歴史を持っているということである。<sup>(8)</sup>つまり、この安比川流域の独特な歴史が語ることは我々の一般的知見に反して、ここの木地屋は移住していないという事実である。何故そのようなことが起こったのか、或いは起こり得たのかという事は後の検討にして、まず木地屋がいつ頃からこの地に定着していたかをみておきたい。これも近世以前については具体的な年代を特定できる史料はほとんどないが、安代町史、浄法寺町史、その他調査報告書等は古代にまで遡

[表-1] 木地屋・塗師・漆掻職人の流域分布（単位／人）

安比川流域	町	地区名	木地屋		塗 師		漆掻職人	
			昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
			20 年代	61 年	20 年代	61 年	20 年代	61 年
上流域 ↓ 中流域	安代町	畑	67	2	18	2	0	0
		五日市	0	0	5	0	0	0
		浅 澤	2	1	76	1	0	0
↓ 下流域 ↓	浄法寺町	大清水	13	1	26	1	32	2
		駒ヶ嶺	2	0	1	0	5	2
		浄法寺	1	0	2	1	42	2
		御 山	2	1	0	1	104	2
		漆 沢	0	0	1	0	137	21

ってその起源を求めている。浄法寺に天台寺が開基した神亀5年（728）ころには寺院文化の隆盛とともに浄法寺椀が作られており木地挽の仕事もこれと切り離しては考えられず、平泉文化を支えた漆器の木地もこの流れにある、という。こうした見解は口碑伝説を別にすれば先に述べたように、ものとしての椀、例えば御山御器、古式箔椀、秀衡椀といった資料に即してのことであろう。

これに対して文献で確認できる木地屋の動きは藩政期以降のことである。田中が収録した文献によれば、例えば寛文5年（1665）4月24日の日付を持つ文書からは、浄法寺の田山村に勘解由衛門、孫右衛門という木地屋がおり、また同じ浄法寺の松岡村の畑という所には左衛門という木地屋が住んでいたことがわかる。<sup>(9)</sup> この畑は赤坂田付近のことで、橋本鉄男が指摘するように畑は木地屋と特別の因縁のある地名である。<sup>(10)</sup> また左衛門は左衛門四郎を代々襲名した御用木地師で、600年ほど前に美濃の国から浄法寺に移住したという口伝があるという。<sup>(11)</sup> これらのことから判断すれば、やはりこの地域における木地屋の歴史が少なくとも近世以前に遡ることは認め得るのではあるまいか。

### （3）安比川流域における木地業の形態について

この地域では木地業の形態についても特徴的なものがみられるので、それについて文献を参照しつつ見ていきたい。

安比川流域のろくろが他の地方の資料と比べて極めて独特の形をしていることは既に述べたが、実はその仕事の形態も独特であった。『漆掻き漆塗師の生活習俗』はその様子を詳細に述べている。<sup>(12)</sup> それによれば木地屋はカタウチ（又は荒カタウチ）とシラキフキの二つの職種に分かれておりカタウチは荒カタを作る専門で、シラキフキだけがろくろを使って木地を挽くという。シラキフキの「フキ」は恐らく「ヒキ（挽き）」の訛ったものだろう。



また、この二つの職人の割合が集落の中でカタウチ10戸に対してシラキフキは2戸の割合であったという。これも興味深いことである。一般的な理解では木地屋はろくろを操って腕木地などを挽く職人と考えられているが、ここではこうした木地屋は全体の2割足らずで、多数を占めるカタウチ職人はろくろを使わない仕事をしていた。つまりいわゆる狭義の「木地屋」ではなかったのである。さらにそれぞれが独立した家内工業的な仕事を営み、カタウチ職人の家では荒カタが貯まるとシラキフキを頼んで来てもらい挽物にする。シラキフキはこうして依頼があるとナビキトというろくろの綱を引く者を連れ、ろくろを背負って訪問先で挽物の作業をするのである。シラキフキの報酬は出来高の2割5分が通例で、シラキフキはこの報酬からナビキトに労賃を支払う習慣であった。つまり厳密にはカタウチ、シラキフキ、ナビキトの3種の職が独立して分業で腕木地を生産していた。ろくろ仕上げした製品をシラキと呼び、これが塗師屋に渡って漆器が完成する。塗師屋はシラキを「ノシ」て(表面を削ってなめらかにする)、更にシタオトシ(糸尻の中に残った爪跡を削り落とす)をして漆塗りとなる。シタオトシは塗師自身が行うかシラキフキに依頼して行う。多くの場合、塗師屋は木地屋の仕事もできる人たちであったと言われている。

#### (4) 独特の構造はなぜ生まれたのか

ここまで見て来た歴史背景と独特の木地業の形態を踏まえてもう一度ろくろの構造に戻って、なぜそのような構造が生まれたのかを探してみたい。

まず他に例を見ないV字構造はなぜ生まれたのか、この謎を解くカギは軸受を構成する上下二枚の板(東北のろくろ職人はこの板を障子と呼ぶ<sup>(13)</sup>)の上板の辺にある切込みである。ここに段差、もしくは切込みが斜め方向に入っていることを第1節で述べたが、これがあるために通常より上板の幅を長く確保しなければならなかったのだ。そして支柱下部での支柱間距離を変えずに上部で幅を広げようとした結果支柱が上に向かって開く構造になってしまったのである。ではこの段差、切込みの役割は何だったのだろうか。それを解くカギは、一枚の写真にあった。八幡平市博物館の木地屋の仕事を紹介する展示コーナーに手引ろくろで作業する様子の記録写真が飾られている。<sup>(14)</sup> その写真にはろくろ鉋で切削作業をするときに鉋を固定する腕木(浄法寺では「渡し棒」)が二本写っており、一本は正面から削るときのもので写真はその作業の様子をとらえている。もう一本の腕木は側面を削るためのもので一本目とは鋭角に交差し、もう一端がろくろの軸受の上に差しかけられていた。まさに問題の切込み(或いは段差)の部分に腕木が掛けられ、切込みは腕木が作業中にずれることのないよう「受け」の役割をはたしていたのだ。写真では側面からの作業に使うとみられるろくろ鉋がこの腕木に立てかけられており、器の側面から底面にかけての作業ではここに体を移して削ったであろうことを窺うことができる。これらのことから軸受の上辺の切込み(段差)の意味がわかり、支柱をV字構造にしなければならなかった理由も明らかだろう。

ただ、これだけではまだ疑問な点がある。通常は軸受を構成する二枚の板(障子・支挟)

は両端の厚みを表裏双方から一定の幅で削り、直立する二本の支柱の内側に掘られた溝に落とし込んでいる。これをスライドさせることで軸受の締め付け具合を調節しているのだ。しかしV字の支柱では、支柱の開き角に合わせて板の両端を細工して落とし込むことは出来てもスライドさせることはできない。実際、資料を観察してみると軸のはめ合い精度を調節できないので、薄板を軸受に挟んで苦しいやり繰りをしているのがわかる。スライド出来そうに造られていても構造的には破たんしているのだ。木工技術の問題としてみても直角の仕口や継ぎ手に比べて斜めの接合は難しいはずだが、なぜ敢えてそうしなければならなかったのか、疑問が残るのである。そもそもV字構造ではなく、他に方法はなかったのだろうか。この答えが宮城県の資料にあった。

宮城県刈田郡蔵王町遠刈田新地<sup>とがったしんち</sup>で調査した資料についての詳細は後に述べるが、浄法寺のV字構造のろくろとの関連で結論だけ述べておきたい。

遠刈田新地の手引ろくろは浄法寺と同じヨコ受型で、軸受を構成する上板の上辺には段差があることも同じである。従ってこの板の幅もかなり長い。しかし決定的に違うのは支柱が直立していることである。つまり軸受の板幅を伸ばすために、ろくろの台そのものの幅を広げて支柱は直立したままなのである。従って資料の大きさは浄法寺のサイズをかなり上回る大型ろくろで、重量は何と42kgもあり調査済資料50数点の中でも最大級である。




東北地方で調査した資料の主なデータを比較すると次頁表のようになる。([Ⅲ-表2]参照)

このデータ比較表を見てわかることは浄法寺の資料が重さもサイズも非常にコンパクトであるということである。特に「浄法寺-3」は際立って小型のろくろである。

恐らく腕木・渡し棒を使うろくろ技法は東北に広く行われていた方法であつたと思われる。そしてその基本形は遠刈田新地のタイプだったのではないだろうか。すなわち支柱間の幅を広げて軸受構成部材の長さを伸ばすために、台の幅を大きく広げてそこに直立支柱を立てるタイプである。ただ結果としてこの方法はろくろの大型化を招き、重量増大を避けられなかった。これに対して浄法寺では(2)、(3)で見てきたように、持ち運びが容易なろくろでなければならない事情があつたのである。つまり御用木地師として軸伝馬にろくろを付けて領内の招請にこたえて出稼ぎしなければならず、また地元にあつてもカタウチ職人の家々にろくろを背負って訪問してそこで挽物製作に励まなければならなかったのだ。このことが軸受上部を「受け」に使う切削技法を変えずに、ろくろ本体の軽量化を工夫する動機となつたのだと思われる。結果、台幅を広げずに支柱上部だけ幅を広げるV字構造を生み、さらに台の厚みも一般的なろくろの半分にまで削り、台中央に窓を開けて軽量化を図ることとなつたのである。こうして遠刈田新地のろくろの6分の一という軽量化が実現したのではないだろうか(浄法寺-3)。



[Ⅲ－表 2]

	資 料	支 柱	支柱 元釘	爪数	爪配置	台形	台厚 (mm)	台幅 (mm)	台長 (mm)	重量 (kg)
岩手県	浄法寺-1						58	445	955	21
"	浄法寺-2						59	355	870	12
"	浄法寺-3		なし				63	295	720	7.3
"	浄法寺-4		なし				70	330	857	12.5
秋田県	稲川町-1		なし				58	430	1040	17.5
"	稲川町-2		なし				60	333	935	—
宮城県	遠刈田新地		なし				130	670	965	42

## 第2節 秋田県のろくろ

秋田県には有名な川連漆器があり、秋田県のろくろ資料として確認できた4点はいずれも川連漆器とかかわりのあるものであった。しかしこれらのろくろはそれぞれの経緯と背景があつて資料所在地はすべて異なり、2点は県外で保管展示されている。またそのうちの2点は極めて類似した特徴を持ち、他の2点はまったく別系統の資料である。さらに言えばこれらのうち3点は他に例のない独特のものである。こうした特異な事情が川連漆器の歴史と密接に関係しているところがまた興味深い。では、歴史的な検討は後にしてまず個々の資料の概要から述べよう。

### (1) 川連のろくろの概要

#### ① 縄引きろくろ (秋田県立博物館所蔵) (調査台帳番号32) 採集地：稲川町川連 (村越)

基本構造はヨコ受型で、支柱が浄法寺と同様にV字に開いている。しかしそのほかの部分では浄法寺とかなり異なっており、外観の印象ではにわかに同じ系統とは言えないものがある。まず支柱の高さが低く、軸受を構成する上下の板も幅が狭い。また上板の上辺には浄法寺同様切込みがあるが、この資料では3カ所と数が多い。この上板と支柱との接合部分は支柱の溝に落とし込んだ上に両端上部を内側からクサビで押さえてある。さらに大きな違いは後部軸受で、台とは別の角材を柄組で差し込んでおり二木式であることだ。また後部軸端に鉄芯がなく、軸本体よりわずかに細くした木軸の端部がそのまま大きな軸受の穴に差し込まれている。これは浄法寺にも一点だけ同じ方式のものがあつた (浄法寺-3) が、各地の資料を見渡しても他に例がない珍しいものである。さらに浄法寺との相違点を挙げれば、台形がトンボ型 (左右対称) であること、台中央部には四角い窓がなく代わりに角皿の

ように薄く掘り下げていること、爪の数が3本円環型であること等である。こうしたいくつかの相違点にもかかわらず川連と浄法寺を結びつけている要素は、ろくろ鉋による切削作業で前部軸受の上板を支持棒の受けに使っていることである。残念ながらこの資料では浄法寺の「渡し棒」に相当する資料は付いていないが、切込みの形からは同様の支持棒を使っていたことがわかる。

② テビキクロ (国立歴史民俗博物館蔵・展示)<sup>(15)</sup> (調査台帳番号53)

採集地：稲川町川連 (久保)

本資料も(1)と同様ヨコ受型でV字の支柱を持つ。短く斜めに取り付けられた支柱、細長く棒状に引き伸ばされた軸受の板、その上辺に刻まれた三箇所切込み、その両端を押さえるクサビなど、形態から構造の細部までほとんど同じと言ってよい。注目されるのは後部軸受の入念な細工と独特の工夫である。軸部の分解ができなかったため確認はしていないが、後部軸受に差し込まれた軸端は(1)と同様軸本体を少し細くした木軸と思われる<sup>(16)</sup>。さらに、この木軸と軸受の穴との遊び(わずかな隙間によるガタツキ)を解消し円滑な回転を得るためにパッキンとして繊維状のものを詰めてあった(樹皮を薄く剥がしたようなもの)。そしてこのパッキンの脱落を押さえるために軸受の前方の面を覆う薄板が取り付けられていた。台に柄組で固定された後部軸受本体(角材)と同じ寸法で作られた薄板には本体に細紐で括りつけるための受け(小さな切込み)が上下に刻まれており、また軸受本体の背面にもこれに対応した位置に切込みが入っている。この細工の入念な仕上げはまるで指物職人の手になるかと思うほどである。しかし残念ながら肝心の細紐は欠損していた。

もう一つ注目されるのは(1)とも共通する軸の造りである。作業上の要請から支柱がV字に開いた点は岩手県浄法寺と同じ技術系統になると思うが、爪の数が3本であることに加えて軸の形が中細である点は会津の特色を示すもので、そちらとのつながりも考慮に入れなければならないのではないだろうか。いずれにしても他の地域には見られない独特の形態、構造はその使い手の系譜や製作物も含めて後段で検討したい。

③ 綱引きろくろ (川連漆器伝統工芸館蔵・展示) (調査台帳番号33)

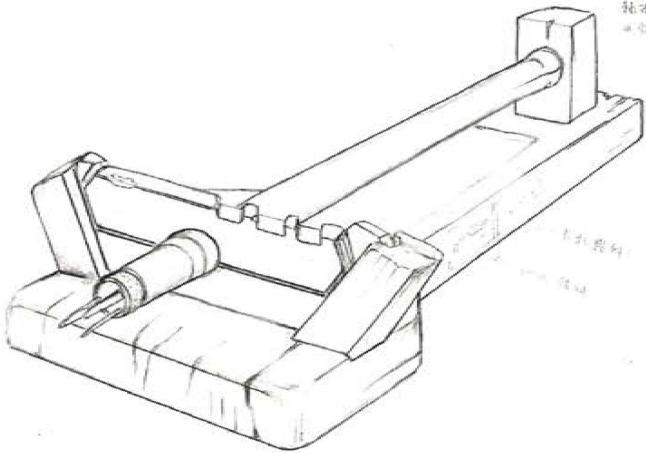
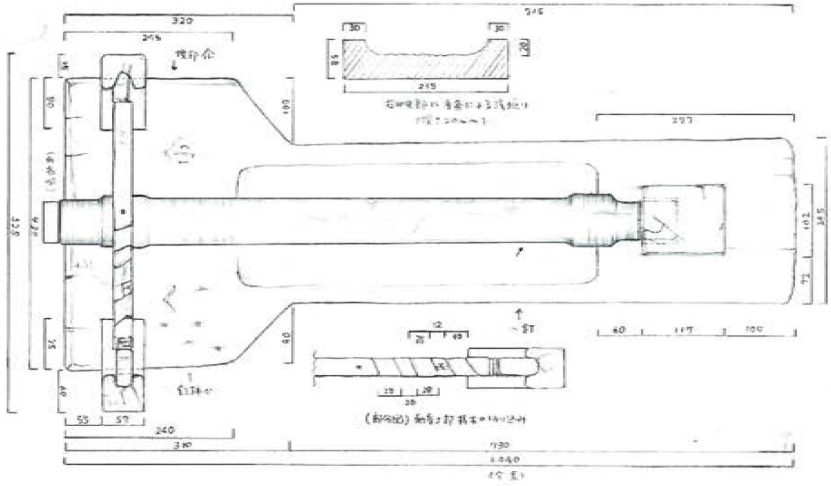
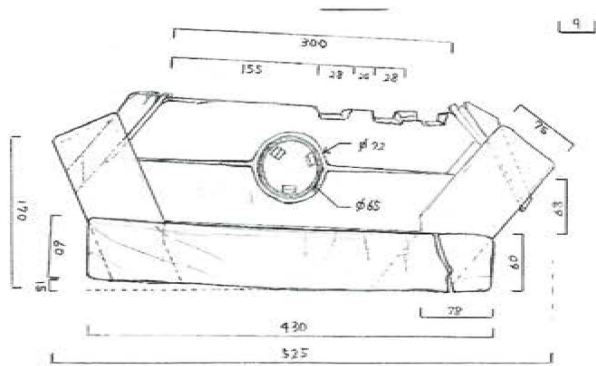
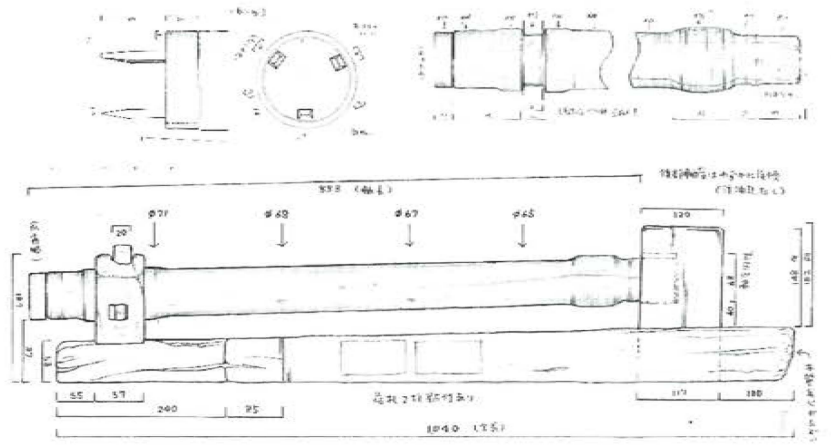
採集地：稲川町川連

この資料だけが使用地稲川町に保存され、地元の展示施設に飾られているが、その並外れた大きさに圧倒される。台の長さ(130 cm)は岡山県立博物館の真庭市田羽根の資料(137 cm)に次ぐものだが、その重さにおいてはすべての調査資料で最大であろう。ガラスケースにおさめられているので計測不可能だったが外観を見ただけで十分予測できる、それほど<sup>(17)</sup>の重量感である。

この資料の基本的構造はヨコ受型支柱をもつ木軸手引ろくろであるが、よく見れば長さ84 cmの木軸は三本が接いであり、恐らく中に鉄軸が貫通しているものと思われる。つまり長い鉄棒を20数センチの木管3本で包んでいることになる。前部軸受ではその鉄軸が露出



資料所在地(施設)	秋田県立博物館 秋田県秋田市金足鶏崎字後山52	地方名 縄引きろくろ
調査台帳No.	32 稲川町川連 エーコ 10-220	
文化財指定等		
   		  
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 縄引きろくろ          採集地 秋田県雄勝郡稲川町川連(村越)          所有者 伊藤雅義          採集年 昭和45年10月</p> <p>〔製作地〕〔使用地〕          〔製作者〕不明 〔製作年代〕          〔製作法・材質〕          〔使用者〕 〔使用年代〕 * 台の前方に 山型に「小」の焼き印あり          〔使用法〕</p> <p>〔保存状態〕 木質の劣化が見られるが、それほど古い資料とは思えない。</p>		<p>〔観察記録〕</p> <p>基本データ = 全長1040mm、軸長883mm、軸径68mm、重量17.5kg</p> <p>特徴 = 軸受のヨコ桟木が非常に幅広で、上面の切込みの数が多い。</p> <p>&lt;支柱・軸受&gt; 浄法寺と同じ系統に属するV字の支柱を持つ。しかし、次の点で浄法寺と異なる。軸の上の桟木が幅広で、上面に3つの切込みがある。桟木の両端が斜めに切り落とされ、支柱内側からくさびで押さえる仕組みである。前部軸受はシンプルな段欠き型。後部軸受は鉄芯ではなく、軸端部を一段細くして後部軸受の穴に差し込む式。浄法寺825に次いで二例目。</p> <p>&lt;軸&gt; 軸径は7cm弱でほぼ直通。爪は3本円環型。これも浄法寺と異なる、むしろ会津のろくろと類似する。ただ金輪の径はほとんど軸と同じ太さで、したがって爪の間隔も離れている。軸の後端部に膨らみがあるが意味不明。</p> <p>&lt;台&gt; 浄法寺のバチ型に対してこれは典型的なT字型。台中央に四角い穴はなく、軸の下にあたる部分を手斧で浅く掘って窪ませてある。後部軸受は二木式。角材を台にほぞ組で取り付けてある。台前部の幅が43cmと広いのに対して支柱が20cmほどで低く、正面から見ると横に平たい独特の形態である。</p>

台帳番号	32	秋田県湯沢市稲川町(川連)〔秋田県立博物館 蔵〕	地方名	縄引ろくろ	(エーコ 10-220)
〔見取り図〕			〔平面図〕		
					
〔正面図〕			〔側面図・部分図〕		
					



資料所在地(施設)	千葉県佐倉市城内町117 (国立歴史民俗博物館)		
調査台帳番号	No.53	秋田県稲川町	資料番号 F86
文化財指定等			



基本データ＝全長935mm 軸長725mm 軸径48～66mm

#### <観察記録>

- 〔形式・概要〕 東北地方に見られるヨコ受V字型のろくろで、秋田県博の資料と同型である。東北でも岩手の浄法寺とは異なり、更に特異な構造をもつ。
- 〔支柱〕 長めの横棧を受けるために2本の支柱の間隔が広く、V字に開いている。長さは短く太いのでずんぐりした印象。
- 〔軸受〕 二枚の横棧(板)で軸を挟んでおり、上の棧の上辺には3箇所溝が切られている(斜めの溝)。渡し棒の受けと思われる、東北独特のもの。
- 〔軸〕 前部と後部がわずかに太く、中間部が細めの軸(中細型)。軸表面にはろくろ目がなく平滑で木目が見える。軸受部は単純な段欠き構造。
- 〔後部軸受〕 軸の後端は鉄芯がなく軸本体を軸受に差し込んで木芯としている。軸受は角材を台に埋め込んだ二木式。軸との隙間調節のために薄皮状のものをパッキンとして詰め、押さえるために手前に板をつけてある。板を軸受に縛るためか、四辺上部と下部の計8か所に紐の受けを刻む。
- 〔爪・軸頭〕 爪は3本円環型、ろくろの大きさに比して短く太い爪である。軸頭は円錐状に先端が細くなり、小さく幅のある金輪がついている。
- 〔台〕 幅広の胴に小さなT字部を持つトンボ型。軸下の受皿は用途不明。

〔地方名〕 テビキロクロ

〔採集地〕 秋田県雄勝郡稲川町久保

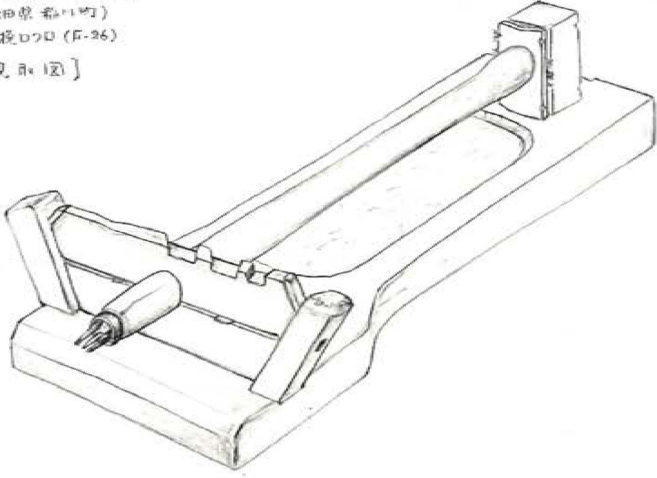
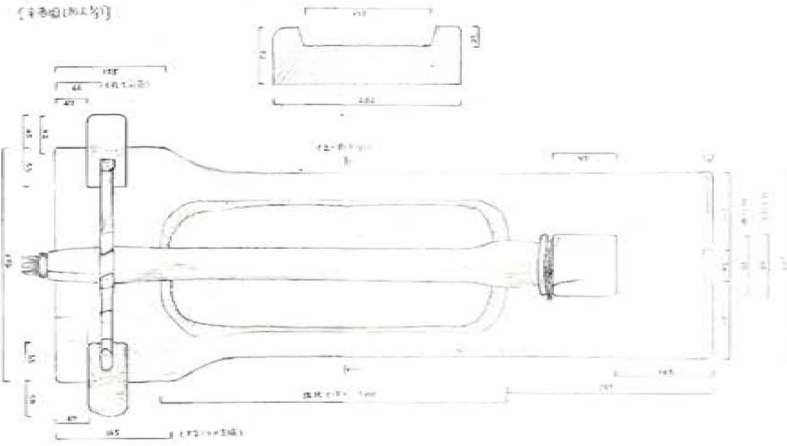
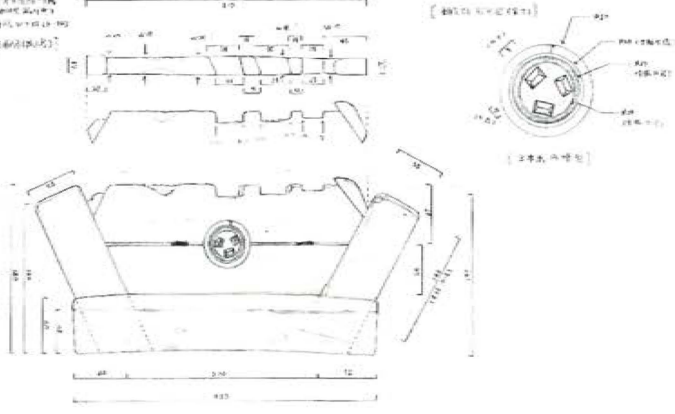
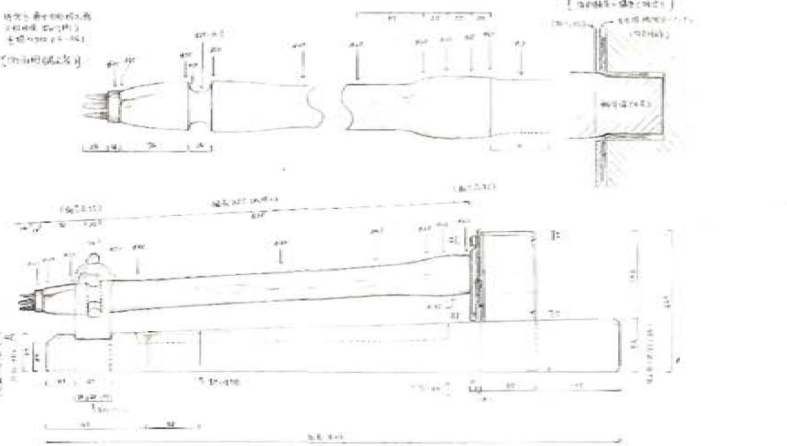
〔製作地〕 同 〔使用地〕 同

〔来歴〕

「本資料は秋田県雄勝郡稲川町(現湯沢市)で明治期まで使用されていた手挽ロクロで(後略)」(歴博資料データベース)

このろくろについては橋本鉄男の『ろくろ』(1979法政大学出版局)に所収の著者蔵として紹介されているろくろに酷似しており、橋本が稲川町の伊藤雅義から譲り受けたと説明していること、外形寸法が一致することから、おそらく橋本鉄男が歴博に寄贈したものではないだろうか。秋田県立博物館所蔵の資料とまったく同じ特徴をもつ。

〔保存状態〕 使い込まれているが、木質の劣化や腐りはなく、全体が黒光りするほどよく手入れされた資料である。

台帳番号	53	千葉県佐倉市城内町117(国立歴史民俗博物館)	秋田県稲川町	名 称	テレビキロクロ (資料番号F86)
<p>歴史民俗博物館蔵  (秋田県稲川町)  手挽キロクロ (F-26)  〔見取図〕</p> 			<p>秋田県稲川町蔵  (秋田県稲川町)  手挽キロクロ (F-26)  〔手挽図 (F86)〕</p> 		
<p>秋田県稲川町蔵  (秋田県稲川町)  手挽キロクロ (F-26)  〔手挽図 (F86)〕</p> 			<p>秋田県稲川町蔵  (秋田県稲川町)  手挽キロクロ (F-26)  〔手挽図 (F86)〕</p> 		



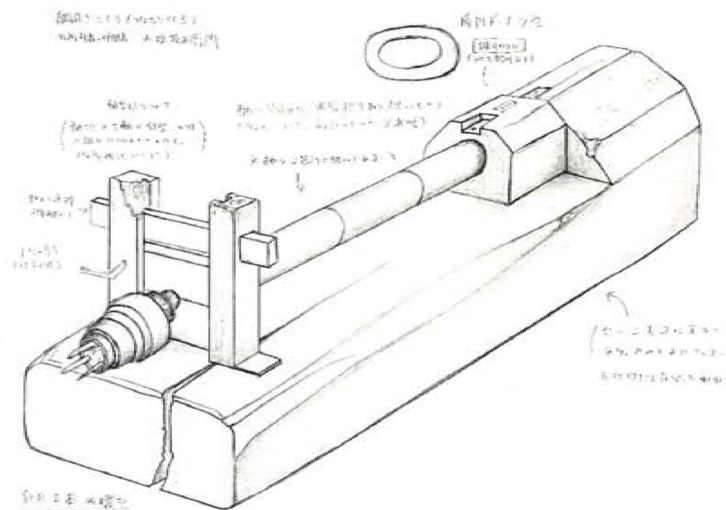
所蔵施設(所在地)	川連漆器伝統工芸館 (秋田県湯沢市稲川町)	地方名 綱引きろくろ	
調査台帳No.	33 稲川町川連		
文化財指定等			
			
<p>〔資料来歴〕</p> <p>地方名 綱引きろくろ  探集地 秋田県雄勝郡稲川町川連  旧所有者 小椋政右衛門 (信州木曾谷から移住した木地屋)  採集年 年月  本資料の所有者は小椋政右衛門という信州系統の木地屋。信州遠山(売木村、南信濃村、上村の付近)で仕事をし、その後遠州水窪町の山住(浜松市)から、会津滝の原、秋田県小阿仁村萩形(はぎなり)山へ移住。この頃父要蔵から政右衛門の代に(本資料を使用)。この後政右衛門はさらに北の五城目町へ。政右衛門に弟信右衛門がおり、その子は川連の佐藤漆器店の婿に入る。(最後で最北の氏子狩(蛭谷)は秋田県の増田か?)(以上、金井晃氏による)</p> <p>〔保存状態〕 全体に良好な状態で、使用されていた時の様子を伝える資料。  〔その他〕 トクサの使用法。板の先端に4本の指状の切れ込みを作り、トクサ4本を差し込んである。</p>		<p>〔観察記録〕</p> <p>基本データ = 全長1300mm、軸長838mm、軸径50mm、重量不明</p> <p>特徴 = 他に例がない大型ろくろ。どっしりとした重量感である。</p> <p>＜支柱・軸受＞ ヨコ受け型の軸受。二枚の棧木を支柱間に落とし込んで軸を挟み、その上にもう一本の棧木が二本の支柱を貫く。この部材は新しく補ったものだが、本来の役割がよくわからない。展示資料では下の軸受板を押さえるためにもう1枚板を挟んでいるが、本来の形とは思えない。後部軸受の形も独特。台と一体の大きな軸受の前に小さな軸受部材を継ぎ足したようだ。</p> <p>＜軸＞ 大型のろくろであるが台のサイズのわりに軸の長さは短い。後部軸受が二つ分の長さを占めているため。軸は三本継ぎでほかでは見ない形。おそらく前部軸受部が鉄製シャフトであることから、軸の中を鉄芯が貫通しているのではないかと推測。軸受部を分解できず未確認。爪は三本円環型。軸頭部が径の違う輪が4段ほど重なった形状で、おそらくアダプターに対応したものと思われる。展示資料に、そのアダプターがいくつか添えられていた。</p> <p>〔台〕 長さに加えて厚みもあり重量感がある。両側面に大きめの面取りあり、足をかけたと思われる光沢あり。注油孔あり、蓋なし、周辺の油污れひどい。</p>	



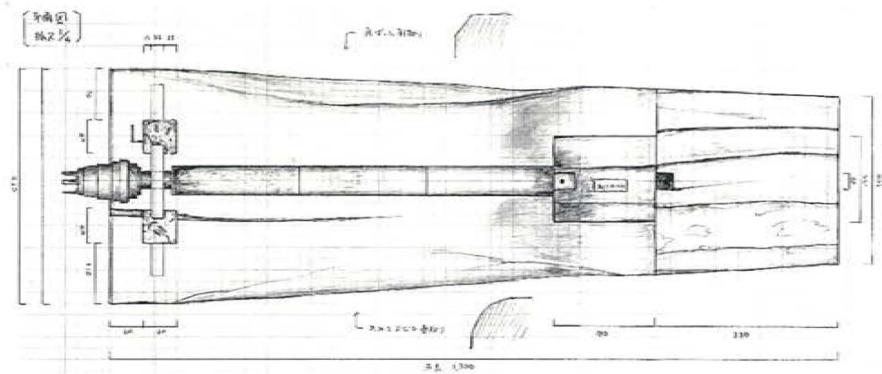
台帳番号 33 秋田県湯沢市稲川町(川連) [川連漆器伝統工芸館]

現地名 縄引きろくろ

[見取図]

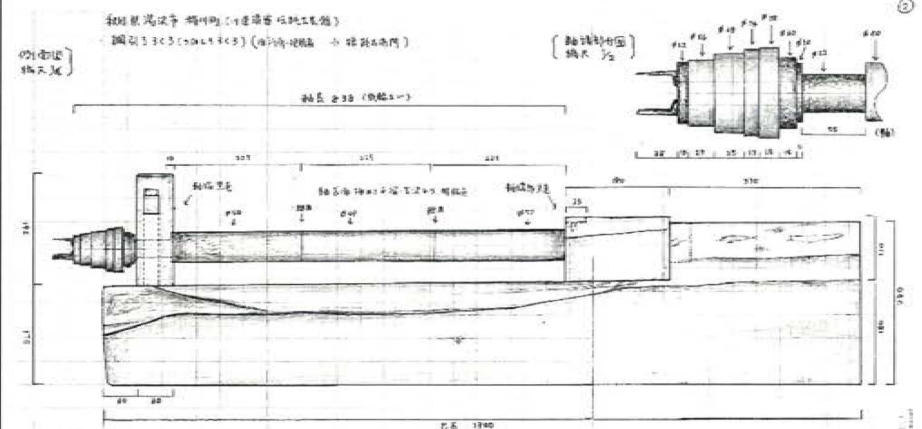


[平面図]

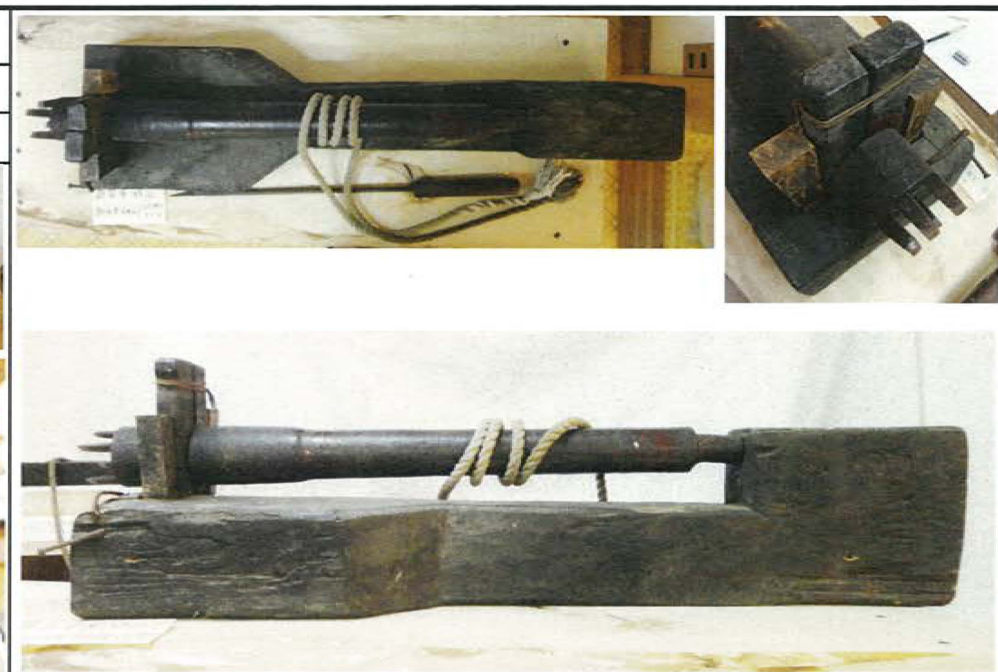


[正面図]

[側面図]



資料所在地(施設)	滋賀県東近江市蛭谷 (筒井神社宝蔵庫)		
調査台帳番号	No.51	秋田木地山	資料番号 59
文化財指定等			



基本データ= 全長965mm 軸長720mm 軸径56~70mm

#### ＜観察記録＞

〔形式・概要〕 タテ受型ろくろで大きさは標準的なサイズ。引き綱、支柱結え

紐ともにあり。引き綱は市販のロープで把手なし。結え紐も綿糸を使用か。

〔支柱〕タテ受型の標準的な支柱。正面右側の支柱中ほどにわずかな凹み。

〔軸受〕単純な段欠き型と思われる。(分解できず推測)

〔軸〕特徴的な軸形である。前軸受部から10cmほどのところで段がついて細くなっている。また後端から数センチのところでも更に段が着いて細くなっているがろくろによる細工ではなく、鑿で不整形に削っており、主軸とは中心線がずれている。意味は不明。後端部は径数ミリの鉄芯で受けている。

〔後部軸受〕後部軸受は台と一体型。四角い掘り込みの注油孔あり、蓋なし。

〔爪・軸頭〕4本平行型、爪の開き66mm、長さ40mm、太く丈夫な爪で、その一部が金輪のふちにかかっている。よほど頑丈にしたかったのか。軸頭の径は主軸の径より数ミリ太く、意匠的要素のない円筒型。金輪も大きい。

〔台その他〕トンボ型の台。T字部は左右対称で幾分長め。側面に固定用に使ったと思われる鋸の跡が前後2箇所にある。支柱の付け根に角棒の痕。

〔地方名〕 ジク

〔採集地〕 秋田県雄勝郡木地山村

〔製作地〕 同

〔使用地〕 同

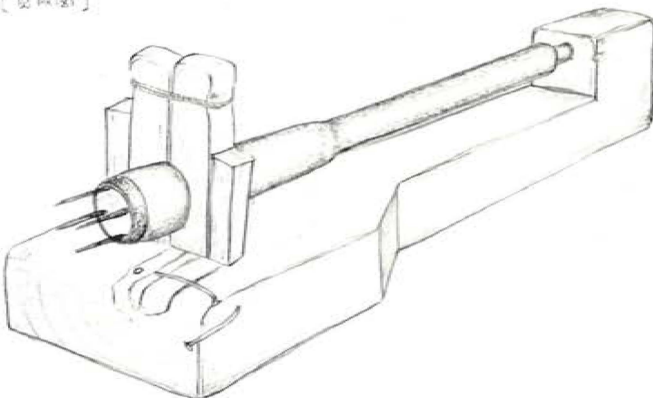
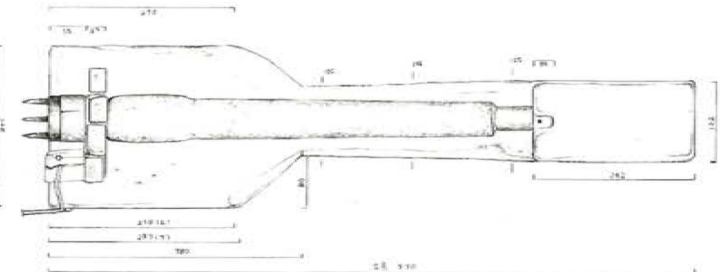
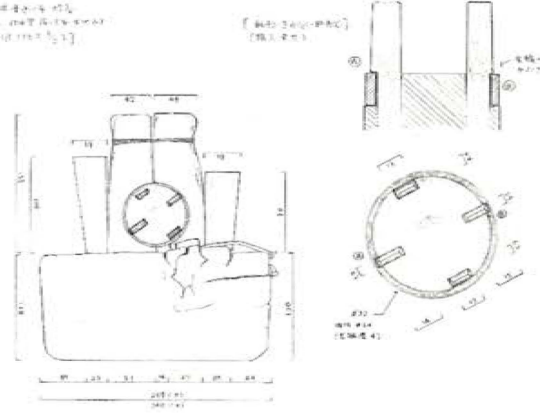
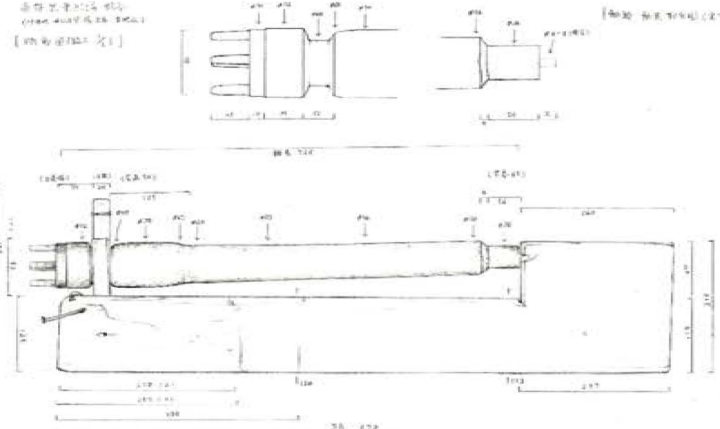
〔来歴〕

資料は秋田県雄勝郡皆瀬村木地山(現湯沢市)のこけし作りで有名な小椋久四郎氏使用の物。橋文策の『木地屋のふるさと』1963未来社には、著者所蔵としてこのろくろが紹介されている。このことから、おそらく橋文策が小椋久四郎から譲り受けたものを後年蛭谷に寄贈したと思われる。

\* 小椋久四郎家は信州から北へ移動して秋田県皆瀬村の木地山に定住したといわれる木地屋の一族。久四郎はこけし作りで有名となる。

〔保存状態〕 かなり古く全体が煤で黒光しているがほとんど傷みはなく、保存状態は良好。台前部にひび割れあり釘で補修している。



台帳番号	51	滋賀県東近江市蛭谷（木地屋民芸品展示資料館）	採集地・秋田県湯沢市木地山	名称	ジ ク
<p>滋賀県東近江市 蛭谷 二人持（ツノ） （使用地 秋田県湯沢市 木地山） 〔図取図〕</p> 			<p>滋賀県東近江市 蛭谷 （使用地 秋田県湯沢市 木地山） 〔寸法図〕（単位：mm）</p> 		
<p>滋賀県東近江市 蛭谷 （使用地 秋田県湯沢市 木地山） 〔寸法図〕（単位：mm）</p> 			<p>滋賀県東近江市 蛭谷 （使用地 秋田県湯沢市 木地山） 〔寸法図〕（単位：mm）</p> 		



しており径 32 mmであることがわかる。前部軸端には木製の軸頭がはめ込まれ 3 本円環型の爪が付いている。また木製軸頭には 3 段の段差が付いており、付属品として爪付きのアダプターが展示されていることから、径の大きな爪を装着することが出来るものと思われる。いずれにしても(1)、(2)の資料とはまったくタイプの異なるろくろであり、構造的にも新しい工夫がみられることから近代以降の製作とみられる。

#### ④ 二人挽きろくろ（滋賀県東近江市蛭谷 筒井神社資料館）（調査台帳番号 51）

採集地：秋田県雄勝郡皆瀬村木地山（旧所有者 小椋久太郎）

蛭谷はいうまでもなく近世を通じて全国の木地屋を支配統制した根源地のひとつ筒井神社のあるところだが、その社殿の奥に「木地屋民芸品展示資料館」がある。そこには氏子駄帳をはじめ御縁旨や御縁起書など貴重な木地屋文書のほか、往来手形などかつて筒井公文所が発行していた品々が保存展示されている。その一面に一台の古い手引ろくろが置かれている。これがこけしで有名な秋田県皆瀬村木地山で小椋久四郎の使っていた手引ろくろである。なぜそれが蛭谷にあるのかは不明だが、橘文策『木地屋のふるさと』に著者蔵として本資料の写真が掲載されており本文で小椋久四郎の使っていたものとの説明があることから、恐らく橘が小椋久四郎から譲り受け、ある時期に蛭谷に寄贈したものであろう。以下に資料の概要を述べる。

① ②のV字型とはまったく異なり、また③の大型ヨコ受型とも違う、それらとは別系統であることが一目でわかるタテ受型ろくろである。爪は4本平行型で、これも他の資料の3本円環型と対立する特徴だ。軸の形が独特で前部軸受から12センチほどのところで軸径が細くなっている。前部の径が70 mmに対して、中・後半部は径56 mm、つまり縄のかかる部分が細くなっているのである。さらに後部軸受の手前数センチからはさらに細くなって径36 mmである。その理由はわからないが不思議な形である。台は左右対称のトンボ型だが頭部が大きいのが特徴。一般的には前部軸受の支柱基部は幅を確保する意味で広くなるが支柱の後ろで胴部に向かって細められる。本資料では全長の3分の1くらいが幅広の頭部となっている。

#### （2）川連漆器と木地屋の歴史

秋田県のろくろ4点の概要を見てきたが、それらはいずれも川連かその近くの木地山で使われていたものであった。それではそうした木地屋を引き寄せて来た川連はどんな歴史を歩んできたのだろうか。古くからの漆器産地として知られる川連漆器だが、その起源は明確にはわからないという。木地がなければ漆器碗はできないということから、塗は別にしてまず木地生産に着目して考えてみたい。東北ではよく「<sup>じきじ</sup>地木地、<sup>いきじ</sup>居木地」と「<sup>ながしきじ</sup>流木地、<sup>わたり</sup>渡木地」という2系統の木地屋が対比されて語られることが多い。橋本鉄男、江田絹子など東北の木地屋に関心を寄せた先学の文献にも度々そうした表現がみられるが、この場合後者の「流木地」「渡木地」は近江発祥の伝説を携え氏子狩を受けながら北へ移住を繰り返して

きた、いわゆる「江州木地師」を指す。<sup>(18)</sup> 氏子狩の記録はもとより、旧家の古文書にもそうした南からの移住を伝える文書が散見される。それに対して前者の「地木地、居木地」の解釈は少し注意がいるようだ。橋本は、「地木地、居木地」も家系をたどれば近江につながると彼ら自身は主張しているが果たしてそうだろうか、と疑問視している。この言葉には木地屋の歴史を考える上で非常に重要な問題を含んでいる。すなわち、ろくろを操って木地挽物を製作する技術が、ある 1 点を起源として国内各地に広まったのか、その起源が複数であるのかという大問題に行き着くからである。もちろんこの大きな問題について橋本も決して断定的なことを言っているわけではない。「南部にしても津軽にしても、ここの木地屋の系統については、また、別個の視角でもってアプローチする必要を痛感する。」<sup>(19)</sup> と述べるにとどまっている。恐らくこのことにある程度の見通しを持って論ずるためには、考古学の分野の力を借りねばならないだろう。この問題については後の章で触れることにして、当面する「地木地」と「渡木地」の違いに話を戻せば、この表現には近江を出立して東北に至るまでの歴史的時間差だけの問題とする考え方もあるということだ。勿論その時点での木地業の業態によることは言うまでもないが。

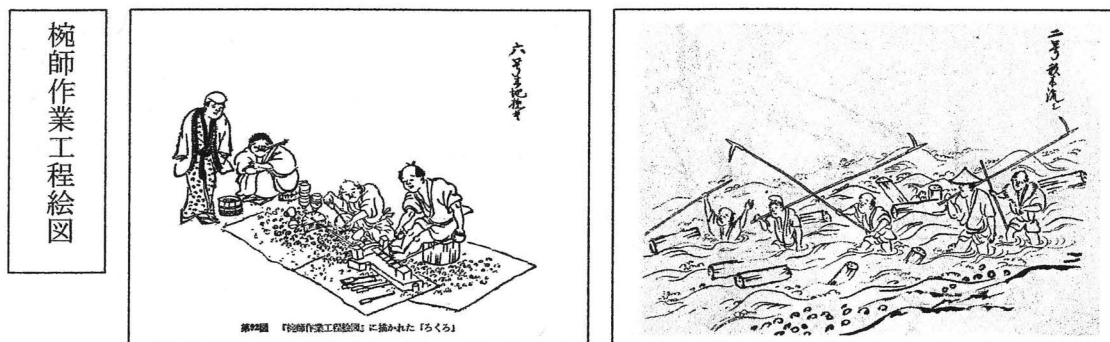
江田絹子は「羽後に形成された木地山と川連の木地業」<sup>(20)</sup> で巷間伝えられている川連漆器業の起源についていくつかの説を紹介している。平泉の藤原氏が京都から呼んだ木地屋の一部を当時の川連城主小野寺道則が招いたという説、また頼朝の藤原追討の際に敗走した武将と共に木地屋が逃れてやがて川連に木地挽の技術を伝えたというもの、さらに室町時代に大館（川連の一部を成す地域）の城主が秀衡腕を基として腕作りを始めたという説など。口碑伝説の域を出ないが、いずれも木地製作を担ったのが南から良材を求めて移住してきた「江州木地師」とは別系統の木地屋であることが注目される。川連では木地屋は「腕師」あるいは「五器師」と呼ばれるというのも、こうした事情を物語っているように思える。

また、ここの漆器製作を特色づけているのは地元の豪商が資本を投下して漆器の生産を支えていたことで、久保では高橋利兵衛家が、大館では中野藤兵衛家などが知られている。またこうした家に残された文書の解読により「腕師」がいわゆる木地屋ではなく農民が百姓の傍ら腕師をしていたことがわかったという。<sup>(21)</sup> このことから川連における木地業の態様が窺えるが、果たして彼らの仕事ぶりも江州木地師とは大きく異なっていた。

### （3）腕師と木地屋

江田絹子によれば、川連の腕師は周辺の山から原木を買い、皆瀬川を利用して自宅まで運び、そこで木地に挽き、漆を塗り、製品にしたという。各工程は家族のほか下人や貧農層を雇ってすべて家内で仕上げたという。また川連では農家が腕師のところで木地業を身につける地木地的な木地屋ばかりである、とも。<sup>(22)</sup> こうした町場における木地業の営みは、小集団で深山を移動しながら伝統の技を代々伝えていたいわゆる近江系統の木地屋のイメージとは大きく掛け離れている。こうした姿を生き生きと伝えている貴重な図像史料がある。その名も「腕師作業工程絵図」といい、作者は幕末から明治にかけて川連で腕師として仕事を

していた佐藤五郎右衛門という人物で、孫が他家に婿入りするにあたって椀師の仕事を代々忘れることのないようにと自ら絵図を描いて与えたという。その婿入り先の加藤家に伝えられていた資料を世に出したのは川連の塗師で漆器研究家の伊藤雅義であった。<sup>(23)</sup>



さて「椀師作業工程絵図」に描かれたような地木地の系統が川連漆器草創期から木地製作を担っていたことがわかったが、南から東北に入ってきた近江系統は川連とかかわりがなかったのだろうか。江田によれば川連の周辺には江戸時代文政初期（1818～）から近江系統の木地屋が入りいわゆる木地山が作られていたという<sup>(24)</sup>。その代表的なものが皆瀬村の川向に入った初右衛門系、高松村の桂沢に入った岩右衛門系の木地屋たちだが、既に地木地によって椀作りが成り立っている川連で彼らは木地製品をどこにさばいていたのか。再び江田によれば、椀生産の中心となっていた大館、久保の両地区が幕末に相次いで大火に遭い、それ以後近江系木地山からの木地仕入れの記録が椀問屋高橋家に見られるようになった、とのこと。大火による木地不足を補う役目を契機として嘉永以降、羽後木地山に小椋系木地屋が多く集まり隆盛を見たというのである<sup>(25)</sup>。やがて小椋系木地屋も山を下り漆器の街の中に溶け込んで仕事をするようになっていったという。

こうして川連は様々な時代背景の中で地木地と渡木地が複雑に入り組みながら東北を代表する漆器産地として発展していったのである。

#### （４）川連のろくろの特徴と木地業

さて前節までに川連のろくろの特徴、すなわち浄法寺のV字構造に似ているが多くの点で独自の特徴を持つ2点の資料、それとはまったくタイプの異なる大型ろくろ1点、さらに前三者と相違する木地山の1点、計4点について概略を見て、更にその背景となる川連漆器の歴史をたどって来た。ここではそれらを突き合わせながらなぜこうした特徴のろくろが川連で使われたのか、あるいは生まれたのかを考えてみたい。

まず、浄法寺のV字構造の意味するところをもう一度振り返っておこう。そこでは器の側面・底面への切削の際に鉋固定のための渡し棒という道具の一端を軸受上板の上辺に差しかける技法があり、その為に上板の幅が必要であったこと、ろくろを背負って移動先で仕事をしたり、さらに古くは伝馬に載せて領内へ出稼ぎしていたこと等から軽量化を図らなければならなかったこと、これらを両立させるための工夫がV字構造を生んだ背景であった。



では、川連ではどうだろうか。先にも触れたように資料としての渡し棒は確認されていないが、資料①と②の軸受上板には3つの明瞭な切込み溝があることから、川連においても同様の技法が使われていたことは間違いない。またどちらも椀の製作を主としていた点でも共通する。では、川連に軽量化の動機はあったのか。このことは他の文献には見当たらなかったが、復刻版『椀師作業工程絵図』の解説に記されていた。『絵図』のp37に伊藤雅義が説明文を書いており、そこには「江戸末期になると、挽師といわれる木地挽きだけを専門の業とする者が現れ、椀師の家々をまわって木地を挽いて歩くようになった。」と記されていた。<sup>(26)</sup> これは浄法寺における木地屋の業態とまったく同じである。つまり川連においても、ろくろは軽くなければならなかったのである。浄法寺のろくろの検討で掲げた[Ⅲ-表2]によっても重量は若干浄法寺の資料を上回るが、データ全体としてみればほぼ同じ傾向を示していることがわかる。

次に資料③について検討したい。この資料は大きさにおいてほとんど他に例を見ないものだが、ろくろの形式からいえば典型的なヨコ受型で3本爪の木軸タイプと言える。ただ木軸が三本継で芯に鉄軸が貫通しているのが特徴だが、実はこれらの特徴はすべて会津の軸に例がある。先ず3本爪は多くの会津の軸にみられる(調査番号18、19、21、38、54、55)。また継いではないが木軸に鉄の芯が通っているものは湖南町の軸に例があり(調査番号56、57)、会津経由で茨城の太子町に定着した大蔵家にも同様の木軸ろくろがある(調査番号40、41)。実は③のろくろを使用していた木地屋の家系についてはかなり詳しいことがわかっている。国内各地に残る古文書調査から木地屋の家系と移住の歴史を追求している会津の研究家金井晃によれば<sup>(27)</sup>、このろくろを使っていたのは小椋政右エ門という信州系統の木地屋だという。その道筋だけ記せば、遠州水窪、信州遠山(南信)、会津滝の原、鳴子中山を経て秋田木地山へ至る。<sup>(28)</sup> その後天保年間には川連の近くに下りて川連漆器への木地供給の木地屋として稼業する。なお政右エ門には信右エ門という弟がおり秋田に入らず宮城県鬼首<sup>おにこうべ</sup>にとどまるが、其の信右エ門の息子岩右エ門は川連に来て佐藤漆器店に婿入りする。また政右エ門は川連からさらに北の小阿仁村、五城目町方面へ移住したというから、まさに漂泊の木地屋そのものの人生である。いずれにしてもこの③が他の2つとはまったくタイプが異なることは理解できるだろう。このろくろの特徴から当然持ち運んで使う事は考えられず、木地山から川連近辺の町に下ってからの木地製作に使ったと思われる。またなぜこれほど大型化したのか、それは製作物に理由がありそうだが確認はできていない。

次に④の資料については、既に述べたように秋田木地山の小椋久四郎の使ったろくろであることがわかっている。木地山系こけしで有名だがこけしを作り始めたのは温泉土産として売れ始めた大正半ば以降のことで、それ以前は木地屋として椀作り一筋の渡世であり、その供給先は当然川連であった。ではこの小椋久四郎家はどのような系統の木地屋であったか、「東北地方の木地屋の移住史覚書」で橋本鉄男は羽後木地山を舞台としたさまざまな系統の木地屋の移住史について氏子駈帳、寺の過去帳、墓標調査等様々な方面から詳細に検討し、論じている。<sup>(29)</sup> その中で宮城県大崎市鳴子町鬼首<sup>おにこうべ</sup>の旧家に伝わる文書に江戸末の文化

年間に信州飯田から 100 人を超える木地屋の大移動があった、と記されていたことを踏まえて、羽後木地山にもその流れがあったことを想定しており、結果的に初右衛門系と岩右衛門系の二つの流れが秋田側に入って移住を繰り返し江戸末の嘉永年間から明治にかけて木地山で仕事をしていたと結論付けている。これは既出の江田絹子の論考とも一致することである。さらに橋本は、その初右衛門の分家が小椋久四郎家で、木地山への移住は岩右衛門系や初右衛門系の木地屋が川連の町に下った後のことである、としている。

同じ地域の木地屋の来歴を論じた江田絹子は「羽後に形成された木地山と川連の木地業」で久四郎家の家族とその周辺への聞き取りから、久四郎家の先祖が信州から会津に渡った木地屋で、父徳右衛門の代に羽後に移住したことを確認している<sup>(30)</sup>。

さてこれらの考察を総合して小椋久四郎家が会津経由で東北に移住した信州木地屋であることがわかり、従って資料④は信州木地屋の使っていた手引ろくろの形を伝えるものであることがわかった。

以上 4 点の資料の形態と構造の背景を探ってきたが、まだ十分な情報がそろっていないと言えないのが実状である。さらに①、②については使用者情報がまったく欠落しており、今後の課題としなければならない。

しかしいずれにしても川連漆器草創期からの地木地に加えて江戸末期には信州系統の渡木地も椀木地供給を支えていたこと、そして地木地の使ったろくろが①、②の V 字軽量型ろくろで、信州系統の渡木地が使ったろくろにはヨコ受型とタテ受型の 2 系統があることがわかった。これらが一つの漆器産地の中で共存したところに川連漆器の独特の歴史を垣間見ることができるのではないだろうか。

### 第 3 節 宮城県のろくろ

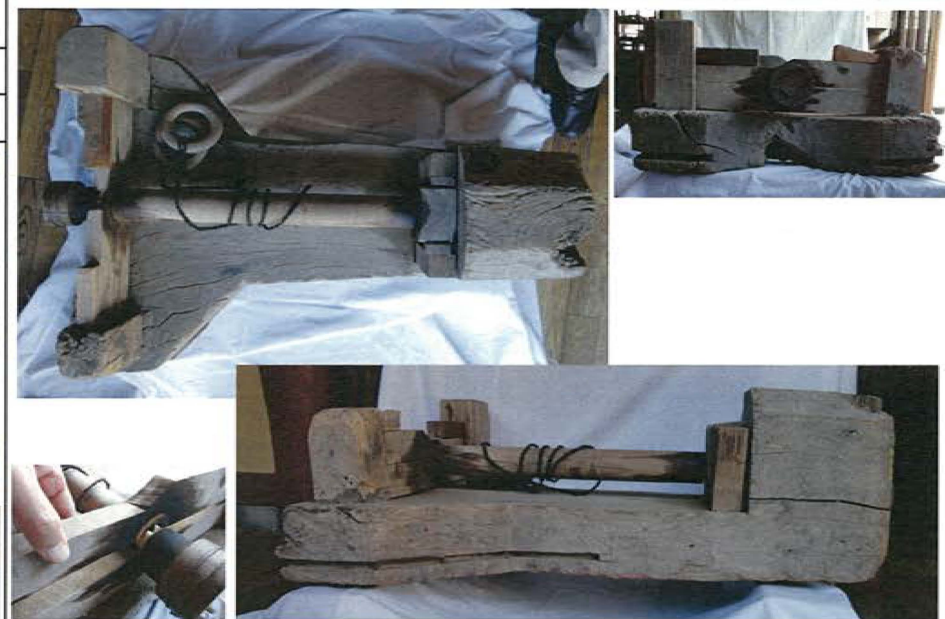
#### (1) 蔵王町遠刈田新地のろくろ

宮城県は鳴子をはじめ木地・こけしの産地が多いが、木地製作用ろくろとして確認できた手引ろくろは遠刈田新地の本資料 1 点だけである。その意味で貴重な資料と言えるが、実はこの資料が示す特徴が浄法寺や川連の資料との関連で重要な意味を持っており、そうした特徴を持つ唯一のろくろという点でさらに貴重な存在であった<sup>(31)</sup>。

#### ① ろくろ (蔵王町遠刈田新地 佐藤すみえ蔵) (調査台帳番号 64)

本資料は蔵王町遠刈田新地でこけしと木地玩具の工房を営む佐藤家に所蔵されていた古い手引ろくろである。新地は今ではこけしの里のようにになっているが、明治半ば頃までは木地椀の製作が中心であった。木地玩具は子供たちのために古くから余技として作られていたようだが、やがて遠刈田温泉の土産品として木地製品に変わる位置を占め、さらに数ある木地玩具の一つに過ぎなかったこけしが一躍人気商品となったのは昭和も戦後になってからのことだという。従って本資料は明治 18 年頃まで専ら椀木地製作のために使われたもので、20 年代には足踏みろくろに変わり、大正に入って電動ろくろへと変遷している。

資料所在地(施設)	宮城県刈田郡蔵王町遠刈田新地 (佐藤すみえ蔵)		
調査台帳番号	No.64	遠刈田新地	三人挽きろくろ
文化財指定等			



基本データ＝全長965mm 軸長685mm 軸径63mm 重量42kg

#### <観察記録>

〔形式等〕ヨコ受け型ろくろ、引綱には輪型の把手あり。42kgの重量は異例。

〔支柱・軸受〕支柱間が普通のヨコ受型よりもかなり開いており、軸受となる横棧も長い。軸受は単純な段欠き型。横棧の上面に一段の段差あり。

支柱は手前より奥が長い。横棧は支柱を貫通せず、両方ともクサビ止め。

〔軸〕円柱型で全体に平滑でろくろ目なし。軸長685mm。径63mm。

後部軸端ははずれなかったが隙間からの計測と目視で木芯とみられる。

〔爪・軸頭〕爪は4本平行型、長さ4mmと極端に短く、開き幅は70mm。芯なし。

軸頭は単純な円柱型で金輪なし。補強のために細い針金を二カ所に巻く。

〔後部軸受〕台と一体の大きな軸受部の手前に別材で軸受を付けた二木式。

台一体の受け部には軸を差し込む穴が確認できなかったため、当初から二木の設計。軸受は通例より大きめの穴に木芯を差し込んであるが、分解できず、詳細は不明。

〔台・その他〕台の形状はトンボ型だが、支柱間が広いためにT字部が異様に大きく、胴部は短く見える。全体の形はパチ型。材は二股の枝木の形を利用。頭部前半の台下部外周に細い溝が掘られているが用途は不明。

〔地方名〕 三人びきろくろ

〔採集地〕 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田新地

〔製作地〕 同 〔使用地〕 同

〔来歴〕 佐藤家は明治後半以降はこけしや木地玩具の製作をして来たが、それ以前は梶を挽いていたという。曾祖父の周治郎が明治18年ころまで、このろくろを使って梶を挽いていたとのこと。

周治郎 - 豊治 - 照雄 - 憲雄 (現所有者は憲雄氏の妻)

〔保存状態〕 台と手前支柱がかなり傷んでいるが、奥の支柱と軸、軸受はかなり新しい。一部の部材を取り換えて使っていたものと思われる。





資料の特徴としては、「1 岩手県のろくろ (4)」で既に述べたように、ヨコ受型の軸受を構成する上板を鉋の支持棒の受けに使う技法から、支柱間の幅を大きく広げた作りになっていることである。しかし、浄法寺や川連のろくろと決定的に違うことは二本の支柱が直立していることである。結果として台前部の幅が支柱間と同様に広くなり、[Ⅲ-表 2]でデータを示した通りろくろ全体の造りも大型で重いものとなった。このことから容易に推察できることは遠刈田新地の木地屋はろくろを持ち運ぶことがなかったということである。後に見るようにここの木地屋は開村以来一度も移住しない典型的な地木地だったのである。

また浄法寺、川連のV字構造の検討から自ずと導きだされる結論は、この幅広の台と直立した支柱のタイプがV字型ろくろに先行するという事である。軸受調節のために上下の板をスライドさせることが出来ず、ろくろ製作上も敢えて難しい斜め構造の加工が求められる、そうした苦しい構造が生み出される前には本来の合理的な構造を持ったろくろがあるはずだ、というまさにその原形となったろくろがこの遠刈田新地のろくろであった。

本資料の構造の細部について補足すれば、後部軸受と一体となった台が木質の状態からみてかなり古いのに対して、一部の部材が新しいことに気が付く。それは軸と前部軸受及び支柱の一部（正面から見て左側の一本）で、新しく部材を更新したことが窺える。特に軸頭は、伝統的な作りである金輪を使わずに針金を二、三回巻いて補強しており、爪も非常に短いものが4本平行につけられている。これらは伝統的な手引ろくろの様式とは相いれないものである。また他の資料と照らしてもまったく見られなかった特徴として、台の側面と前部木口の下部に幅 15 mmの細い溝がめぐらされていることである。この溝は台の半ばほどで終わっているが、用途はまったく不明である。

この資料と同じものが橋文策の『木地屋のふるさと』に掲載されていた<sup>(32)</sup>。本文説明では昭和初期の調査とあり、同じ遠刈田新地であること、木目や節の位置等からも同一資料であることは間違いない。印刷された写真による確認ではあるが、注目したのは古い軸の形がはっきりと読み取れることで、細身の軸に幅広の金輪がはめられ、短めの爪が3本付いている。現資料では新しい軸に取り換えられてしまったが、古い軸の様子がこの写真で確認することが出来たのである。これらはいずれも会津地方の軸に特徴的に見られるものであった。また台の下部にめぐらされた溝には薄い板が<sup>ひさし</sup>庇のようにはめ込まれており、本来の姿を示すものではなく一部が残存した状態とは思いますが、いずれにしても用途が判然としない。

こうした特徴を持つろくろが果たして遠刈田では一般的に使われていたのだろうか、その疑問に答えてくれたのが佐藤友晴著『蔵王東麓の木地業とこけし』<sup>(33)</sup>であった。同書には村の歴史から工具の変遷まで、その村の出身者でしかも工人でなければわからないような詳細な記録が丹念にまとめられており、その中に村で使われていた手引ろくろが図入りで解説されていた。そこに付された図はやはり巨大な台に幅広の直立支柱を持つろくろであった。細部においては本論で検討している資料と異なるが、かえってそのことが村で一般的に使われていたろくろの紹介であることを裏づけている。各部の寸法から部材の名称や使い方まで詳細な報告であり、図を見ればやはり細身で3本爪の軸が描かれていた。つまり、

遠刈田新地ではこのタイプのろくろが一般的に使われていたということである。

## (2) 遠刈田新地の歴史

前節では、秋田県川連、岩手県浄法寺に特徴的にみられるV字構造のろくろの原形は宮城県蔵王町遠刈田新地で使われていた大型の直立支柱ろくろであることを論じたが、ではその遠刈田新地の歴史はどのようなものだったのか、本節でそれを検討してみたい。

佐藤友晴はその著書で新地の歴史を様々に考察しているが、結局ははっきりしたことはわからなかった。ただいくつかの史実を挙げながら、新地が最初から木地屋の集落として起こった訳ではなく、当初は白石城主の片倉家の下級武士「御徒小姓組」であったこと、仙台藩が近くの七日原で馬の飼育を始めた時に監視役を命ぜられたこと、馬の飼育監督だけでは生活できないことから木地挽を副業として始めたのではないかと結論付けている。もしそうであれば、藩が牧場経営を始めたのが寛保3年(1743)であり、その頃が村の起源かと思われる。この村の歴史については橋本鉄男も「東北地方の木地屋の移住史覚え書」で検討している。<sup>(34)</sup> まず木地屋の移住については、巷間では南に隣接する木地屋集落の横川(七ヶ宿町)から新地へ移住したように伝えているが、延享3年(1746)の氏子狩では横川と弥次郎に巡回しているのに、すぐ近くの遠刈田新地には訪れていないことから、この時点では直接のつながりはなかったはずだ、としてこれらの集落との関係を否定している。つまりこの時はまだ新地は木地挽をしていなかったというのだ。では一体いつ、だれがこの新地に木地の技術を伝えたのだろうか。広い支柱間に長い軸受板を備え、その上辺に鉋固定用の棒を指しかける技法を持った木地屋はどこから新地へ来たのか、それが問題であった。技術的な起源は別として、橋本が新地における木地業の最初は延享の氏子狩以降で、木地挽を始めたのは善兵衛という人物ではないか、と推測している。恐らくその根拠は先に触れた佐藤友晴の著書の一節だろう。佐藤は新地の古くからの家系を四軒に絞り、それぞれの姻戚関係を含めて詳細な系図を紹介している。<sup>(35)</sup> その一軒に松之進家があり、天正年間(1573~1591)からの歴代当主を掲げ明治以降は家族構成も記している。その説明の中で天明年間に木地を挽いた人物として善兵衛が出てくるのである。橋本は新地の家柄の中でも古い系図を持つこの善兵衛家(松之進家)こそ最初に渡木地として木地挽の技術を新地にもたらした家ではないかとしている。ただ、この松之進家の家族の一員がほかならぬ著者友晴であるから紹介する家系が古く詳しいのも当然のような気がする。いずれにしても推測の話と言わざるを得ない。ただ、新地の木地業の歴史が決して古いものではなく、少なくとも18世紀の半ば以降のことであるのは間違いないだろう。ただ、その技術の起源は依然として不明である。

## 第4節 福島県のろくろ

### (1) 会津地方の木地屋の歴史

福島県会津地方が東北の木地屋を語る上で欠かすことのできない特別の地域であることは先学の木地屋研究者が口をそろえて言っていることである。<sup>(36)</sup> 何がこの地域をそれほど



特別な場所になっているのか、それについて考えてみたい。

まず挙げなければならないのは、政治的背景だろう。一般的に木地屋の移住と言えば山の良材を伐り尽し小集団で山から山へ移住するイメージである。しかし会津にあっては時の領主が殖産興業を図って遠方より職人を誘致したとされている。まずよく知られている例では、中世末の天正 18 年 (1590) 蒲生氏郷<sup>がもううじきと</sup>の会津入部に伴って蒲生家の故地江州日野から塗師・木地師を招致したということだろう。郷土史家の多くがその根拠とする『新編会津風土記<sup>(37)</sup>』には次のように記されている。

(耶麻郡酸川野村 端村 高森木地小屋)

(前略) 会津モト木地挽少カリシヲ天正十八年蒲氏郷会津ニ封セラレ、近江国慈教寺カ勸ニヨリ君畑ヨリ木地頭佐藤和泉同新助ト木地挽五人ト、其外慈教寺ノ三男了性ヲ連れ来リ。了性ヲハ府下木戸千軒道本光寺ノ住職トシ、木地挽ハ府下七日町ニ屋敷地ヲ与ヘオキ、会津郡慶山村ニテ始テ木地ヲヒキ、ソレヨリ処々ニ移リ享保三年松原村小野川ヨリ此処ニウツル。今ノ木地頭彦右衛門ト云ハ和泉カ遠孫ナリ。サレハ其業封内ニヒロマリシハ和泉等ニオコレリト云。常ニ山林ニ就テ小屋ヲカケ、良木尽レハ佗山ニ遷リ住處ヲ定メス。其居ヲ遷スヲ飛ト稱フ。

(＊句読点は小椋が補った。)

藩主の経済政策によって木地屋が誘致された例は他にもあるかもしれないが、この風土記の記述が事実とすれば、それによって一大漆器産地の礎となったのは会津だけではないだろうか。連れて来た職人の数は多くはないが、<sup>(38)</sup> 藩の保護奨励策によりその後の会津の山々の木地挽の活況をもたらした意義は大きかっただろう。いわばこれを第一波として、会津においてはさらに同様の政策的背景による木地屋の移住が伝えられている。寛永 20 年 (1643) に会津に移封となった保科正之<sup>ほしなまさゆき</sup>が会津入城にあたって高遠城下の木地屋を招致していた。<sup>(39)</sup> 蒲生氏郷が招致した職人は君ヶ畑の江洲木地師であったが、保科が高遠から呼んだのは当然のことながら信州に渡世していた木地屋たちであった。

こうした領主の経済政策に支えられて会津漆器は隆盛を迎えるわけだが、豊富な森林資源と漆器産地としての木地の安定した市場を求めて江戸期を通じて多くの木地屋が流入した。それらは政策的移住に触発された動きであったり、木地屋本来の良材を求めての移住であったり、様々な背景を持って多くの木地屋が重層的に会津に流入したといっていいたいだろう。その実態を窺うことの出来る資料として『木地語り』には近世前期から中期、後期へと会津の山に展開した木地小屋の一覧表が掲げられている。<sup>(40)</sup> その数の多さには驚かざるを得ないが、ある地域への木地屋の集積としては中国山地を除いて他にはあまり例のない規模である。その結果としてこの地へは江戸時代中期から後期にかけて蛭谷、君ヶ畑双方の近江支配所が頻回に氏子狩に訪れるのである。

この地が特別の場所である理由のひとつとして東北における氏子狩のもっとも活発な活動地であったということと、実はその裏返しとして会津以北への氏子狩の活動は極端に減

少してしまうのである。そして注意しなければならないのは木地屋がさらに北を目指して移動したにも関わらず、近江の支配所はごく一部を除いてそれ以上北へ足を伸ばさなかったという点である。<sup>(41)</sup> このことの意味については、後段でまた論じたい。

この地の特徴的な事象として最後に挙げねばならないことは、地木地といわれる木地挽の存在である。中世末の蒲生氏郷による木地屋招致以前に、おそらく中世の早い時期から活動していた木地屋がこの地域にいたという事実は、この地域の木地屋の歴史を論じた先学が等しく認めていることである。『新編会津風土記』の先の引用の冒頭に「会津モト木地挽 スクナカリシヲ・・・」というくだりは逆に地木地の存在を示しているとも解釈され、『松原軍物語』にも文明年中（1469～1486）会津耶麻郡に木地屋が七十軒ほど住んでいたとの記述がある。ただ、こうした地木地といわれる木地屋について、その実態や出自については様々な見方があり未だ明解な結論が出ているわけではない。

## （２）会津地方のろくろの特徴

前節では会津の木地屋の歴史が、様々な背景が絡み合って重層的でかつ密度の高い歴史を歩いてきたことを見て来た。ではそこで使われてきたろくろはどのようなものだったのか、それを見てみたい。

本章冒頭に掲げた調査済資料の福島県のリストを見てわかるように、資料として完全な形でのろくろはわずかに一つしかない。他はすべて軸のみの資料である。このことは実に不思議なことと言わざるを得ないのだが、これほど密度の高い木地屋の歴史を持ちながら会津地方にはその主要な道具であった手引ろくろがほとんど残っていないのである。そして奇妙なことに残されていたのは軸ばかりであった。この事をどう解釈するかは後段に譲って、まず個々の資料の概要を述べる。

### ① （喜多方市）・・・手引ろくろ 1 点（個人蔵、福島県立博物館寄託）（調査台帳番号 20）

福島県で調査した資料のうち本資料のみが完全な手引ろくろの形を伝える資料である。このろくろについては、使用者に関する詳細な情報が残っており、その歴史は会津に移住した渡<sup>わたり</sup>木<sup>き</sup>地の軌跡を示して興味深いものがある。その足取りが紹介されているのは『木地師三代』という文献で、所有者の縁戚者によってまとめられたものである。<sup>(42)</sup> それによればこのろくろの最後の使用者は小椋千代五郎という信州系統の木地屋で、同家には多くの文書類が残されており、それに基づいて織江、甚吾、千代五郎の江戸末から昭和に至る三代に焦点をあてて同書をまとめたという。会津移住の発端は文化7年（1810）信州伊那谷和合村に居た時のこと。それまでも多くの遍歴を重ねていたが、ここで会津藩からの木地師招請の話聞き、新天地への移住を決意したという。そして会津に入ってから4度の移住を経て定着したのが喜多方であった。その詳細は省くが、ここでの確認はこの手引ろくろが信州伊那谷の木地屋に由来するものである、と言う点にある。

その主な特徴として、基本構造は典型的なタテ受型のろくろで、支柱は右がわずかに幅広

で高さも高い。台の形に特徴があり、支柱取付部から胴へ向かって幅を狭める場合通例は斜めに絞り込む形をとるが本資料では直角に切り込んでいる。またT字部も左右非対称である。爪は4本平行型だが、特徴は軸頭の径よりも爪先端部の開きが大きいことである。椀などの小径物ではなく、もう少し大きな器を挽いていたものと思われる。またこの軸頭は軸本体とは別の部材をはめ込んでおり、針金を巻いて補強している。いずれにしてもタテ受型で爪が4本ある資料は会津では極めて珍しいことで信州伊那谷由来の資料として、また会津における唯一の完全な手引きろくろとしても貴重である。

② (南会津町)・・・ろくろの軸1点(奥会津博物館蔵・国指定有形民俗文化財)

軸以外の部材を複製してろくろを復元(調査台帳番号 18)

本資料は、おそらく会津を代表するろくろの一典型を示す資料と思われるが、軸以外は複製である。ただ、その最大の特徴は軸に表れており、少し細部にわたるがその概要をまとめておきたい。まず軸が細いことで、径が44~45mmと全国平均の57.7mmをかなり下回って最も細い軸となる。ただ軸の両端30mmほどは軸受への対応上、全国平均に近い太さになっており、この形もまた一つの特徴である。さらに軸頭の構造が独特で金輪の幅が23mmと幅広である。他の地方ではほとんどが10数ミリの幅でまさに輪状であるが、会津ではほとんど筒状となる。また爪は3本円環型で、径27mmほどの軸端に三本の爪が細く束ねたように付いており、これらはいずれも会津独特のもので椀製作に特化したものではないだろうか。複製ではあるが、ろくろ本体の構造で特に注目するのは支柱構造がヨコ受型であることだ。このヨコ受型構造も会津を特徴付ける重要な要素と思われるが、その検討は後に譲る。

さて問題はこのろくろを使っていた木地屋がどういう系統の木地屋かということである。旧田島町教育委員会発行の『奥会津地方の山村生産用具〔1〕』<sup>(43)</sup>では、旧田島町針生からの採収であることを記している。七ヶ岳山麓のブナ林が広がる針生は南会津における木地屋の一大拠点ともいわれ、江戸中期から大正、昭和まで二百数十年に渡って多くの木地屋が入れ代わり立ち代わり稼業したところである。会津におけるもう一つの木地屋の集積地耶麻郡の木地小屋が定住期に入って他国からの流入を拒んだという事情がこの背景にあるという。こうして針生へ入った木地屋の前住地は信州を中心にその隣接地三河、美濃、飛騨、甲州等に広がっている。<sup>(44)</sup>さらに蒲生氏郷の招致した江州木地師の流れを汲む一団も合流しており、針生で使われていたろくろ、というだけではその系統を特定することは極めて難しい。

③ (只見町吉尾)・・・ろくろ軸1点(会津民俗館蔵)(調査台帳番号 19)

ろくろの軸のみ単体の資料で猪苗代湖のほとりにある民間経営の資料展示施設「会津民俗館」に展示されており、資料の採取地は南会津郡只見町吉尾。この吉尾地区は『只見町史』によれば同町布沢の奥にあり、大田・夕沢とともに天明年間(1781~1788)に木地屋が移住した所という。彼らは蒲生氏郷が近江から招致した木地屋の末裔といい、幕末から明治に



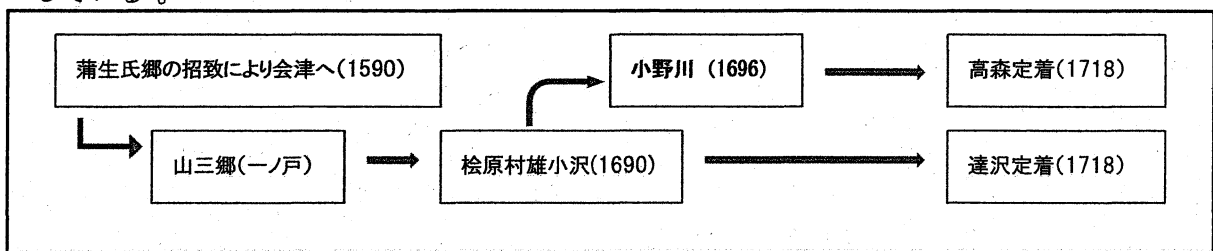
かけて同地から転出し、今も会津若松市内に子孫が住んでいるとのことである。<sup>(45)</sup>

資料の特徴はやはり会津独特の様式を示すもので、軸径 44 mm の細身、軸長は 780 mm と調査済資料の平均 703 mm よりやや長い。また前後の軸受に接する部分の径は 50~60 mm となり、そこだけツバ状に太くなる。軸頭は幅広の筒形金輪に 3 本円環型の短めの爪で、爪の間隔が 13 mm と狭い。また軸尻にも金輪がはめられており、これは事例が少ない。

④ (猪苗代町)・・・ろくろ軸 1 点 (達沢集落 (個人蔵)) (調査台帳番号 38)

ろくろの軸のみ。軸径 49 mm、軸長 774 mm で前部軸受の手前が最大径 57 mm。軸頭の金輪は欠落しているがその跡から推測して幅 29 ミリの筒形とみられる。爪は 3 本円環型で爪は 9 mm 角の鉄材を束ねており、ほとんど隙間がない。

本資料については歴史的背景を窺うことのできる文献があった。先に引用した『新編会津風土記』の小田村端村、木地小屋達沢の項に簡単な来歴が記されており、<sup>(46)</sup> それによれば現在の達沢へは享保 3 年 (1718) に桧原村雄小沢より移って来たことになる。そして実はこの雄小沢では高森の木地屋と一緒にあった。一方先の風土記の引用では高森の木地頭彦右衛門は蒲生氏郷が近江から招致した木地頭佐藤和泉の遠孫である、と記している。これらに一ノ戸に残る郷土誌収録の由来書を突き合わせて解釈し、橋本は次のような経歴を導き出している。<sup>(47)</sup>



つまり江州から会津に入った佐藤和泉一団は雄小沢で残留組と小野川移住組の二派に分かれた後、享保三年 (1718) に (恐らく示し合わせて) 相隣り合った高森と達沢へ移動し、定着して今日に至るのである。以上のことから彼らが持ち伝えたろくろの軸は江洲木地屋に由来するものである可能性が高い。

④ (郡山市湖南町)・・・ろくろ軸 4 点 (中ノ入集落 個人蔵)

(内訳) ろくろ軸 A (調査台帳番号 54)

ろくろ軸 B (調査台帳番号 55)

ろくろ軸 C (調査台帳番号 56)

ろくろ軸 D (調査台帳番号 57)

これら 4 点の資料はすべて郡山市湖南町中ノ入集落の個人がそれぞれ保存していたもので、不思議なことにここでもろくろ本体は失われており、軸のみであった。しかしそのどれもが今まで見て来た軸と同様、会津独特の特徴を示していることが興味深い。その主な特徴

を挙げれば、軸径が細身である（A=41 mm、B=42 mm、C=41 mm、D=43 mm）、軸受の手前にツバ型のふくらみを持つ（A 前のみ、B、C、D 前後、）、筒形の金輪（B のみ、A は欠損）、3 本円環型の爪（A、B）等である。なお、A、B が木軸であるのに対して C、D は鉄軸を芯にして木筒を嵌めた特異な構造の軸で、これも大変珍しいものである。両端部は鉄軸のままであり、特に軸頭は鉄軸の端部を加工して4本円環型の爪を作り出している。これらは鉄軸に旋盤加工を施していることから、当然 A・B の資料より時代は新しく近代以降の製作になるだろう。ただ、そうであっても細部は別として全体の造りに会津独特の様式を踏襲しているところが面白い。

では中ノ入の木地屋はどういう系統か、これについては集落に記録があつて詳細にたどることができる。この集落は以前「岩代木地山<sup>いわしろきんじやま</sup>」と呼ばれ、古くからの木地屋集落として知られたところである。岩代木地山保存会小椋秀男氏によれば同地の木地屋は天正 18 年（1590）蒲生氏郷招致により江洲君ヶ畑より会津に入り、以後二手に分かれて会津の山中を漂移したという。そして天明 6 年（1786）に共に湖南町三代中ノ入に移って現在に至るとのこと。中ノ入では木地を挽きながら田畑の開墾も行つて安定した生活であつたが、近代以降は陶器の普及で木地業は衰退し昭和 10 年前後廃業となつたとのこと。旧家筋には木地文書が残されているが、それを見れば君ヶ畑、蛭谷双方の氏子狩を受けていたことがわかる。

#### ⑥（昭和村見沢）・・・ろくろ軸 1 点【台帳番号 21】

（福島県立博物館・軸以外の部材を補足してろくろを復元）

本資料は福島県立博物館所蔵であるが、やはり軸のみが古い資料でろくろ本体は複製品である。複製部分は新しい白木のままで、軸のみ黒く煤けているのでわかりやすい。資料所有者は昭和村見沢出身で会津若松市内に出て木地職人をしていた小椋家で、同館担当者の話では昭和 58 年に企画展準備のために入手したとのこと。ろくろ本体のモデルは奥会津博物館の資料（調査台帳番号 18）を参考に喜多方の職人に製作を依頼したとのこと。奥会津の資料も復元であるから、オリジナルのモデルは不明だが構造はヨコ受型である。

軸の特徴としては会津独特の様式を示しており、径 45 mm の細い軸に前部軸受の手前に径 55 mm のツバがある。軸頭の金輪は幅 36 mm の筒形で 3 本円環型の爪が狭い間隔で束ねられている。爪の鉄材および加工状態は軸本体の古さに対して新しいので更新したものか。

昭和村には江戸期を通じていくつかの木地小屋が存在し、特に中期から後期にかけては小屋の数も増えて多くの木地屋が稼業していたものと思われる。見沢もその一つであるがその系統は不明である。前項⑤の中ノ入の木地屋の移住史の中に熱塩加納村黒岩から見沢へ移った経過（宝永 7 年（1710））があるので、或いは同じ系統の木地屋であつたかもしれない。もしそうであれば蒲生氏郷招致の木地屋の分派ということになる。

#### （3）会津地方のろくろ、その技術の系譜

会津における木地業の歴史的な背景と調査した 9 点の資料の概略、さらにそれぞれの採

集地の情報等を見てきたが、ここで全体を振り返って会津におけるろくろの技術的系譜について包括的に検討したい。検討する資料は次の9点である。

- (ア) (喜多方市)・・・手引ろくろ1点 (個人蔵、福島県立博物館寄託)
- (イ) (南会津町)・・・手引ろくろ1点 (奥会津博物館蔵・軸以外は複製)
- (ウ) (猪苗代町達沢)・・・ろくろ軸1点 (個人蔵)
- (エ) (只見町吉尾)・・・ろくろ軸1点 (会津民俗館蔵)
- (オ) (郡山市中ノ入)・・・ろくろ軸4点 (A～D) (4名の個人蔵)
- (カ) (昭和村見沢)・・・ろくろ軸1点 (福島県立博物館蔵・軸以外は複製)

このうち(ア)は9点の中で唯一完全な形の手引ろくろで、所蔵する木地屋の家系から信州伊那谷和合村からの来住がわかっている。従ってろくろの技術的系譜は一応信州伊那谷としておこう。(イ)～(カ)まではすべてろくろの軸のみで、そのうち所蔵者から来歴を確認できたのは(ウ)達沢と(オ)中ノ入。いずれも蒲生氏郷招致の江洲君ヶ畑系であった。(イ)は旧田島町針生での採取であるが、会津における木地屋の一大集積地の針生は様々な系統の木地屋が集まった所で、それだけでは系統を判断することはできない。(エ)は『只見町史』によれば蒲生氏郷系の江洲木地屋の末裔とされている。(カ)は直接の情報は確認できないが、(オ)の中ノ入木地屋との接点から、或いは蒲生氏郷系の可能性がある。

以上を踏まえてそれぞれの資料の基本的なデータを一覧表にして示せば次のようになる。

#### <会津のろくろ・・・主なデータ比較>

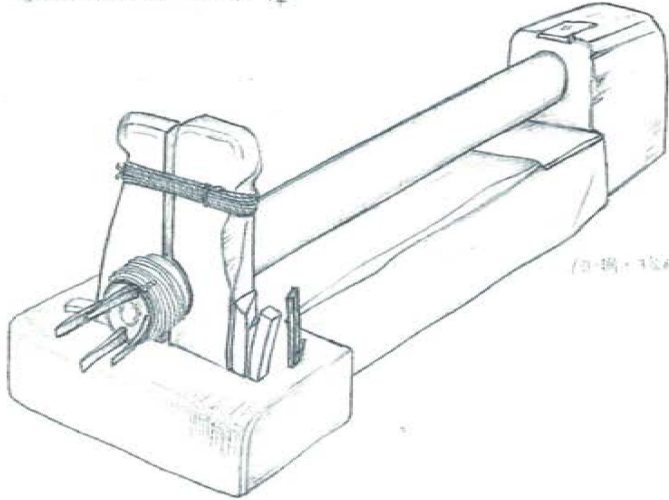
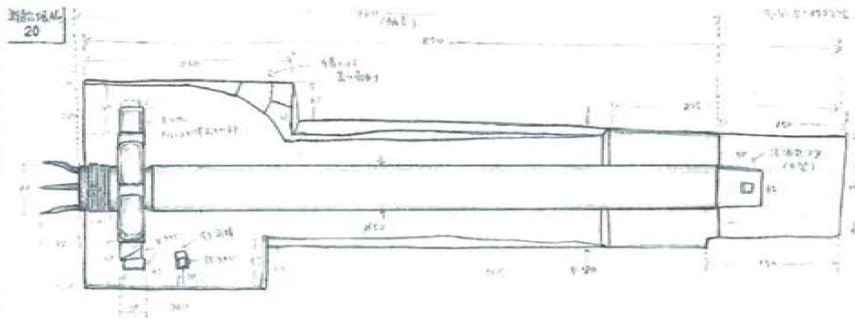
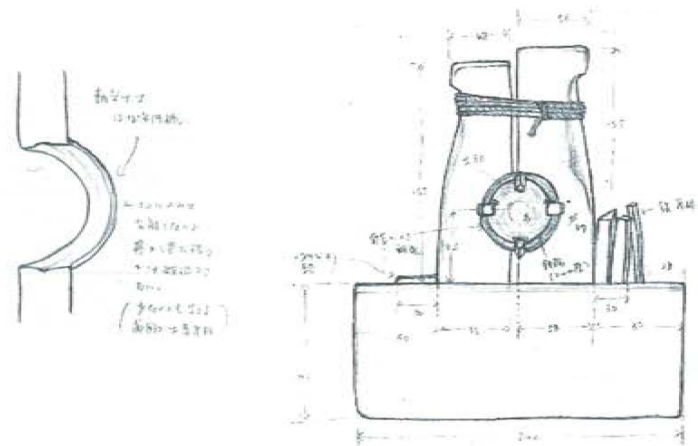
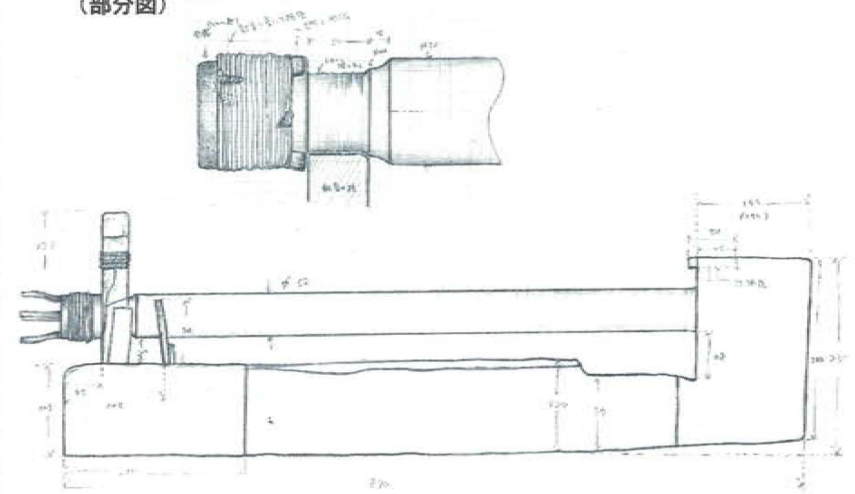
台帳番号	記号	軸径	軸長	爪数	爪配列	金輪形状	金輪幅	軸形	ツバ有無	備考
20	ア	52	740	4	平行	輪状	(10)	円柱	無	
18	イ	45	799	3	円環	筒状	23	細身	有(両端)	
38	ウ	49	774	3	円環	筒状	46	〃	有(前)	
19	エ	44	780	3	円環	筒状	27	〃	有(両端)	
54	オA	41	758	3	円環	筒状	?	〃	有(前)	
55	オB	42	730	3	円環	筒状	35	〃	有(両端)	
56	オC	41	*600	*4	円環	—	—	〃	有(両端)	鉄芯木筒
57	オD	43	*657	*4	円環	—	—	〃	有(両端)	鉄芯木筒
21	カ	45	756	3	円環	筒状	36	〃	有(前)	

(\*印は鉄芯木筒の軸であり、他とは単純にデータの比較ができない)

これだけで直ちに傾向を把握することは難しいかもしれないが、別添の図像と併せて見れば、(イ)～(カ)がほとんど同じグループに括られることがわかるだろう。さらに国内の他地域との比較は本表では唯一(ア)と比べるしかないが、全国各地のろくろ(の軸)と比べれば、このグループの示す特徴がいかに特異であるかがわかる。ほとんど孤立している



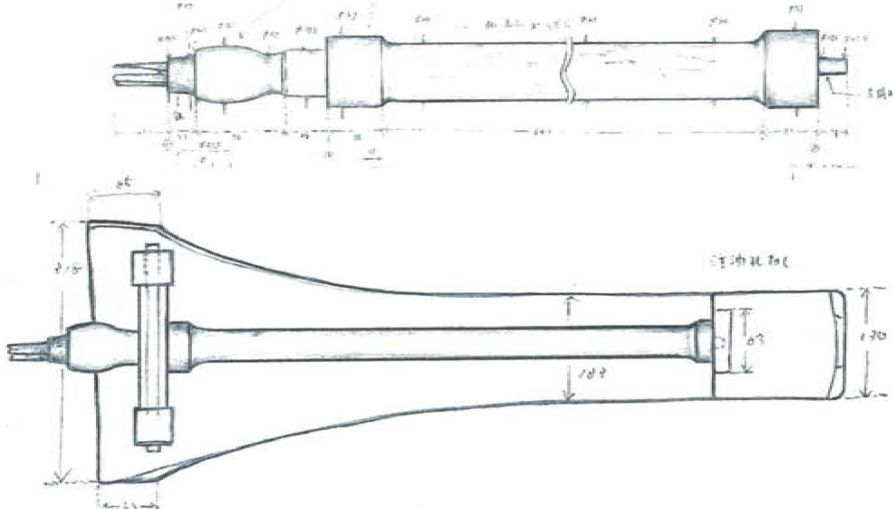
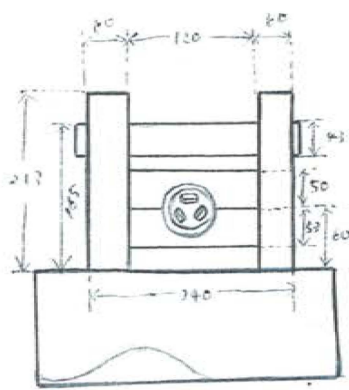
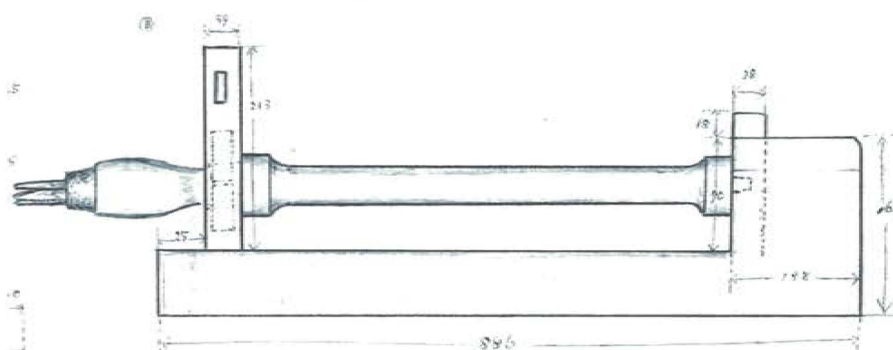
資料所在地(施設)		福島県立博物館展示 (喜多方市諏訪町小椋マチノ所有)		地方名 手引き轆轤	
調査台帳No.	20	原資料No.	ID063374 受け入れ FS000053		
文化財指定等					
 					
<p>〔資料来歴〕 採集地 福島県喜多方市諏訪町 使用者 小椋千代五郎(現所有者 小椋マチノの祖父)</p> <p>文化7年信州伊那谷和合村より会津に移住。以後&lt;南会津岩下、北会津閭川など数回の移住を繰り返して喜多方市に定住し渡り木地職を終えた。</p> <p>〔保存状態〕 木部の腐りなく、よく使いこまれ管理されてきた様子。軸部は滑らかで光沢がある。 爪の取り付け部は金輪の上をさらに針金を巻いて補強している。</p>				<p>〔基本データ〕 全長870mm、軸長740mm、軸径52mm、重量11.3kg 〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・台の形に特徴があり、台頭の幅広の部分から台後部へのくびれの部分が斜めの切り込みでなく、直角の切り込みで、左右が段違いになっている。</li><li>・軸受はタテ受型で上を結ぶひもが付いている。柱は手前がわずかに長い。</li><li>・柱手前の角に切れ込みがある。</li><li>・軸長740mm、軸径52mmで、軸形は円柱・段欠き型。</li><li>・軸受部は中段のないシンプルな形であるが、ブレのない円滑な回転である。</li><li>・軸先端は本体の軸とは別の径57mm木が軸頭として取り付けられ、鉄輪をさらに針金を巻いて補強し、爪と爪の間隔を61mmと広くとって4本爪を打ち込んである。配列は平行型。爪の根元は鉄片を打ち込んで補強してある。</li><li>・注油孔には四角い木片のふたが付いている。</li><li>・引き綱と木製の輪が付いているが、新しい。</li><li>・台の後部軸受手前12cmほどが一段低く削り取られている。</li><li>・手前支柱の付け根に鉄の角釘(角棒)が打ち込まれている。その付け根を鉄の小さくさびで補強。</li></ul>	



台帳番号	20	福島県喜多方市(小椋家)〔福島県立博物館 寄託〕	地方名	手引きろくろ	
<b>【見取り図】</b> 福島県喜多方市(小椋家) 1/4  (3-100・3-100)			<b>【平面図】</b> 		
<b>【正面図】</b> <b>(説明図)</b> 			<b>【側面図】</b> <b>(部分図)</b> 		



資料所在地(施設)	福島県南会津郡南会津町系沢西沢山 奥会津民俗博物館		地方名 テビキロクロ	
調査台帳No.	18	原資料No.	5474	
文化財指定等	国指定重要有形民俗文化財「奥会津地方の山村生産用具」(S57)			
				
<p>〔資料来歴〕  採集地 南会津郡 田島町大字針生</p> <p>〔保存状態〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軸はかなり使いこまれた形跡あり。保存状態良好。</li> <li>・台及び軸受は最近の補作で、黒色着色である。材は栗材。</li> </ul>			<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・軸の特色は、両端の径より中央部の径が細くなる独特の形状にある。  軸長799mm、軸径45mm、軸の長さに対して径がかなり細いといえる。</li> <li>・軸受部の形状は段のない単純なくびれであるが、中央部より径が太くなった端部がツバ状に軸受の内側に接して、軸のブレを抑えている。</li> <li>・軸尻の鉄製シャフトは赤く錆で、油の付着や緑青(ロクショウ)は見られない。</li> <li>・爪は3本で円環型。一本ずつ太さ(幅、厚み)が不ぞろいで、爪先が丸見を帯びている。</li> <li>・台の形状はバチ型と名づけたが、独特の形状。</li> </ul>	



台帳番号	18	福島県南会津町(針生)〔奥会津博物館 蔵〕	地方名	テビキロクロ	国指定有形民俗文化財 (5474)
【見取り図】			【平面図】		
					
【正面図】 (説明図)			【側面図・部分図】		
					

資料所在地(施設)		福島県耶麻郡猪苗代町三城湯 会津民俗館		地方名	ジキボウ
調査台帳No.	19	原資料No.			
文化財指定等					
<div></div> <div></div>					
<p>〔資料来歴〕 現地名 ジキボウ 採集地 福島県南会津郡只見町吉尾 使用者 採集年月日</p> <p>〔保存状態〕 手引きろくの軸のみ、ろくろ台はない。 保存状態は良いが全体がススけて黒く、木目は見えない 鉄部分はすべて赤さびで覆われており、軸尻の鉄芯も含めて金属色を残すところがない。 軸尻に割れ目あり。</p>				<p>〔観察記録〕</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・軸の径が細い上に、軸の両端部がさらに絞られている点の特徴。</li><li>・軸長780mm、軸径44mm。「ロクロのサオ」といわれるほど、細くて長い。</li><li>・軸受部はツバ型で同じ会津で他に二例ある。(奥会津博13、県博28)</li><li>・軸頭鉄輪が幅広で筒型。筒は前方の径が後方より小さく、テーパ状。</li><li>・爪は3本、円環型。中央に木の芯が残されている。</li><li>・爪は短めで、爪と爪の間隔も先端部は10数ミリの輪に入るほどすぼまっている。</li><li>・軸尻に独特の工夫が見られる。一旦軸が細く絞られたあと再びわずかに太くなってそこに鉄輪がはめられている。</li><li>・軸尻の鉄芯の形が独特で、細い鉄の丸棒の端部がイボのように絞り込まれている。(鉄の加工技術からして、それほど古いものではないと思われる。)</li><li>・軸尻の端面が芯を中心に凹面状にへこんでいる。他に例がない形。</li></ul>	